

2020年度

文部科学省委託事業  
「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(略称:AG5)

エー  
A

ジー  
G

ファイブ  
5

だより集

公益財団法人 海外子女教育振興財団

## 本冊子について

弊財団は、1971年に外務省および文部省（現 文部科学省）の許可を受け、海外で経済活動を展開している企業・団体によって設立されて以来、海外赴任者・帰任者のための教育相談・情報提供や、日本人学校・補習授業校への財政上・教育上の援助等をはじめ、政府の行う諸施策および維持会員の要望に相呼応して幅広い事業を展開・実施してまいりました。

一方、日本政府においても、近年急速に発展してきた経済社会のグローバル化に対応する人材育成を喫緊の課題と捉えており、文部科学省では在外教育施設をグローバル人材育成拠点と位置づけて、大学・民間研究団体等の研修者と連携して評価・検証を行い、より高度なグローバル人材の育成を見据えた先進的なプログラムの開発・推進を図ることを打ち出しました。

そしてこのたび弊財団は文部科学省からの委託を受け、それらの指導体制、指導・評価方法、ICT教材の活用等の実証研究を担う「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（略称：AG5）（委員長：佐藤郡衛・明治大学特任教授／前 目白大学学長／元 東京学芸大学副学長）を実施する運びとなりました。

その成果発信の一環として弊財団で発行している月刊『海外子女教育』で2017年度は「日本人学校・補習授業校タマテバコ」という名称で連載し、2018年度からは「AG5だより」と名称を変え現在まで連載を続けております。連載では各テーマの研究の進捗状況や取り組みを紹介しています。本冊子では2020年度のものをまとめました。

弊財団では引き続き、「日本人学校におけるグローバル能力育成のためのプログラム開発」や「日本人学校など在外教育施設におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」、「南米日本人コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発」などに向けて本事業を推進し、これを通じて新たに開発したプログラムや提言を国内外の教育施設へ周知・普及することにより、高度グローバル人材育成に貢献することを目指してまいり所存でございます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2021年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団  
AG5事務局

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

## クレメンティ校発。IBの要素を取り入れたESDによる探究的な学びを目指して～シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校の実践より～

シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校教員 鈴木輝英・鬼塚晶子

シンガポール日本人学校は、創立54年目を迎えます。開校当時28名で始まった本校は、現在小学部2校（クレメンティ校・チャンギ校）、中学部1校（ウエストコースト校）の計3校、児童生徒数約2000名からなる大規模校へと発展し、在外教育施設では世界有数の規模を誇ります。日本全国から集う児童生徒、国際結婚家庭の児童生徒が1つ屋根の下で学ぶ、多様性に富んだ国際色豊かな学校です。



鈴木輝英氏



鬼塚晶子氏

### 小学部「探究科基礎」スタート クレメンティ校の課題

小学部では、現地指導者による英会話（英語科I）やイマージョン音楽・水泳などの英語教育をはじめ、現地校との交流も盛んに行い、現地理解教育にも力を入れています。さらに、四年生以上にChromebook（ノートパソコン）を一人一台割り当て、EV3やMESHを活用したプログラミング教育など、充実したICT環境を生かした実践も行っています。

従来の総合的な学習の時間では、「シンガポール」という国・地域を題材として、校外学習や調べ学習を行ってきました。現地理解教育という点においては、本校の特色ある実践となっていました。

この総合的な学習の時間を見直すきっかけとなったのが、二〇一八年度策定・施行の「シンガポール日本人学校グローバル人材育成大綱」でした。重点課題の一つに「持続可能な社会を実現するための探究力の育成」を掲げ、総合的な学習の時間を中学部では「探究科」、小学部では「探究科基礎」と称し、現地理解教育とおして探究力を身に付けていくこととしました。また、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点や

価値観を取り入れることによる探究的な学びを推進していく運びとなりました。

しかし名称が変わっても実際の実践内容は従来そのまま、シンガポールという恵まれた環境を生かした「グローバル人材の育成」が探究科基礎において十分ではない本校の課題が見えてきました。

この課題と向き合っていくために、在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業である「AG5」にお力添えをいただくことにしました。

### 研究のスタート 全教員で創造していく校内研究

一九年度、クレメンティ校は、探究科基礎を校内研究の中心に据え、「主体的に学び、よりよい考えを生み出す児童の育成を目指して」というテーマのもと、研究をスタートさせました。シンガポールという地の利を生かしたESDの単元開発と同時に、AG5拠点校に指定された利を生かしたIB（国際バカロレア）の要素を取り入れた探究的な学びを目指すことにしました。

在外教育施設においては、教職員の出入りが激しく、研究の積み上げや継続が難しい現状があります。全職員でESDやIBの理論を理解し

ながら実践を積み上げつつ、本校独自のカリキュラム作りを目指していくには時間が必要だと考え、本研究を二か年計画としました。そして、一年目を「学習の年」、二年目を「検証の年」と位置付けました。

研究一年目の前半は、校内で自己研修会を開き、ESDの理論や実践例を学び合いました。そして探究科基礎部会を中心に、従来実践してきたカリキュラムをESDの視点で見直し、各学年で検討を重ねました。

ESDの研究授業は年間三本行い、授業後の研究会では、ESDに対する知識や実践方法などを深めていきました。そのような研修や授業参観を重ねていくうちに、協議に深まりが見られるようになりました。

### 「AG5」から学んだIBの要素を取り入れた探究的な学び

一九年十月、海外子女教育振興財団教育相談室の植野美穂室長と東京学芸大学附属大泉小学校の細井宏一副校長が来校され、「IBの理念を取り入れた探究的な学び」についての研修会が行われました。その中で、IBの基本的な理念とカリキュラム作りの考え方などについてご示唆いただきました。また本校より二名の教員が日本のPYP（IB初等教育

プログラム)の認定校を視察し、ユニット(単元)や授業、カリキュラム作りについて学びました。「百聞は一見にしかず」、この成果が、本校の研究を大きく前進させました。

視察後、研究部と探究科基礎部会のメンバーを中心とした「プロジェクトチーム」を発足させ、AG5事業における研修会や視察の成果をまとめました。そして、次の二点を本校の探究科基礎に取り入れることにしました。

① セントラルアイデア(児童に身に付けさせたい価値観)を中心に据えたカリキュラム作り。

② キーコンセプト(物事を見る視点)を活用した授業作り。

一年目最後の研究授業を行う第四学年の実践には、以上の二点を盛り込み、本校が目指す「1Bの要素を取り入れた探究科基礎」の形を提案しました。

**第四学年の実践**

**「すくえ! シンガポールの危機」**

**1. はじめに**

第四学年の探究科基礎では、環境をテーマにESDの単元を開発し、実践しました。

今日のシンガポールは、ごみの急激な増加、衛生面を考慮した使い捨

てプラスチック容器の大量使用、低iriサイクル率、ホーカー(屋台村)やホテルなどの膨大なフードロスなどの廃棄物問題を抱えています。日本よりはるかに小さな国土であるにも関わらず、ごみの総排出量は日本の総排出量と変わらず、更に年々増え続けています。沖合三〇キロメートルにあるごみの埋め立て地であるセマカウ島は、三〇年には埋め立てることができず敷地がなくなり、閉鎖するとも言われています。

廃棄物問題はシンガポールが持続可能な社会を目指していく上で、避けては通れない環境問題です。これを切り口に本単元を進めてきました。

**2. 課題への気付き**

本単元の導入では、「シンガポールは本場にきれいな街なのだろうか」というテーマで討論を行いました。「空港や中心市街地など、人が集まるところは整備されていて、ごみも見当たらないのできれいな街である」と、児童は考えました。一方で、「ごみの分別をせず、セマカウ島に埋め立てているので、きれいな街ではない」という考えも出ました。児童は、シンガポールに住んでいる経験や、社会科の学習を手掛かりに考えている様子でした。

討論の後、「十年後もきれいな街

でいられるのだろうか」と問うと、「このままではごみだらけになる」「何とかしなければならぬ」と、自

分事として捉える姿が見られました。児童はシンガポールの現状が本当

にそうであるのかを自分の目で確かめるべく、環境問題の調査に取り掛かりました。学校では、ごみ箱を全てひっくり返して、ごみの量を調べ、一年分のゴミの量を想定してしま

した。一番多いごみの種類も確認し、どれも削減可能であることに気が

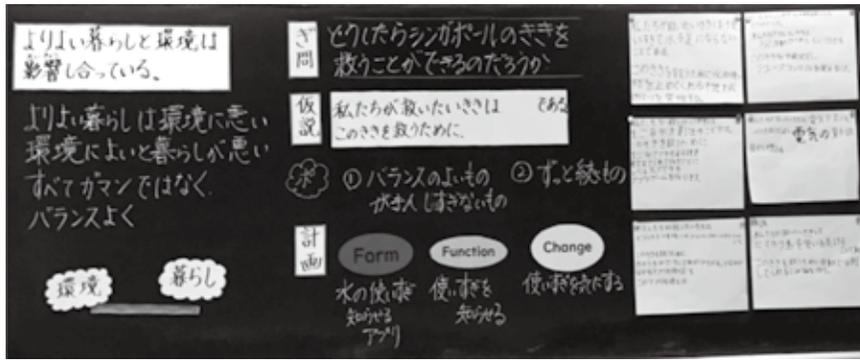
きました。またシンガポールの街調査では、電気の無駄遣いやホーカーでの食べ残し、プラスチックの大量使用などにも気付き、環境問題を捉える視点を広げていました。

とにかたくさんの情報を得たい児童は、ジェスチャー交じりの英語を駆使しながらインタビュしていました。あるグループでは、どのような食器で食事が出てくるかを調査していました。持ち帰る人と食べていく人に分かれて食事を注文し、比較していました。また別のグループでは、飲み物を購入する際はプラスチックのコップではなく、「持ってきた水筒に入れてもらうことはできるのか」と尋ねていました。児童は探究しながらシンガポールの現状を身をもって感じていたよう

**3. 身に付けたい価値観への導き**

本単元をおして育てたい価値観は、「環境をよくするのも悪くするのも私たちの生活次第」ということでした。この価値観に児童を導くために、調査活動を終え、まとめを行う際、「よりよい暮らしと環境は影響し合っている」というセントラルアイデアについて話し合う時間を設定しました。

児童は、このセントラルアイデアを手掛かりに話し合うことをおして、ダストシューター(分別せずに家の中から直接ごみを放り込める設備)がある便利な生活や、エアコンのつけっ放しなどの快適な生活が環境に悪影響を与えていることに気がきました。更に、反対に体調を崩してまでエアコンをつけない、電灯を点けずに暗闇で生活するなど、環境のことばかり考えて自分たちが我慢し過ぎることは持続可能な社会には繋がらないことにも気付いたので、視察したPYP認定校では、小学生の発達段階においては難易度の高い言葉が並べられ、抽象度が高い表現でセントラルアイデアが設定されていました。しかし本校では研究一年目ということもあり、学習の過程で、児童がある程度捉えやすく、自分の考えを持ちやすい表現であること



研究授業の板書

がセントラルアイデアとして望ましくと考へ、「よりよい暮らしと環境は影響し合っている」としました。また、それを言葉だけではなく、図式化して表しました(板書の左下)。シーソーを示して「暮らし」と「環境」の関係性について話し合う

と、どちらかに傾くのではなく、両者のバランスが取れた解決策を考えていかなければならないことに、児童は気付きました。

4. より深い学びへ

その後、グループごとに分かれて、持続可能な社会の実現に向けたアイデアを考える活動を行いました。

活動する際、今回は「Form(形態)」「Function(機能)」「Change(変化)」の三つのキーコンセプト(板書の中央下)を用いて考えさせました。例えば、「自動的にごみを分別する装置を作ったら、分別が徹底してできる未来になるかもしれないが、ごみに対する人の意識は変わらない」と発言した児童がいました。この児童は、「Change」というキーコンセプトを使って、自分のアイデアを分析していました。

児童が自分たちのアイデアをキーコンセプトを用いて様々な角度から分析し、話し合ったことで、学びは一層深まりのあるものとなりました。

5. 発信する児童の姿

本単元の終盤では、シンガポールを救うことはもちろんのこと、世界の環境問題も解決できるような「自動的にごみを分別する装置を作る」「生ごみレシビを考えてネット投稿する」などの画期的なアイデアが考えられていました。

自分たちのアイデアを発信する際には、「SDG's(持続可能な開発目標)のターゲットロゴを入れたい」という声が上がりました。それは具体的に世界のどんな危機を救うアイデアなのかを、見た人に一目で分かってもらいたいという児童の思いからです。中には、自分たちで考えた危機を救う発明品を模型にして発信する姿がありました。また自分たちのアイデアを実践し、確かめる姿もありました。最後の「アイデア投票」では、より多くの人に伝えるために、全校児童や教職員に「これならシンガポールが救える」というアイデアへ投票してもらいました。「ぜひ、見に来て投票してください」と、呼びかける児童の姿もありました。

6. おわりに

「シンガポールにある本校の利点を生かしたグローバル人材の育成はどうあるべきか」という課題に立ち向かうため、セントラルアイデアとキーコンセプトを取り入れた実践を行ってきました。これをとおして、世界的な諸問題に対してグローバルな視点で考え、実践しようとする児童の姿が見られるようになりました。しかし、セントラルアイデアとキーコンセプトの有効な活用法や活用場面については、今後更に検討していく必要があると感じています。

今後の展望・研究二年目に向けて

第四学年の実践ではこれまでの研究の積み上げが形となり、今後の方向性が定まりました。また年度末にセントラルアイデアを中心に据えたカリキュラムを再構成しました。研究二年目では、一年目で練り上げた「IBの要素を取り入れたESDによる探究的な学び」に磨きをかけ、より確かな成果を上げていけるよう研究に邁進していきます。そして、「クレメンティ校発」の探究的な学びの実践を目指していきます。



すぐに取り組めるアクションとして児童が考えた「アイデア投票」、多くの人が行き来する階段の踊り場に設置し、全校に向けて発信した。

# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

## AG5の2019年度の成果

AG5運営指導委員会委員長・明治大学特任教授 佐藤郡衛

文部科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(AG5 (Advanced Global Five) プロジェクト)を開始して3年を終えました。ここでは2019年度の成果を報告します。評価の観点には昨年同様、①学校全体で取り組んでいるか、②教師の実践力の向上につながっているか、③子供の学習成果が向上しているか、④その取り組みを通じたモデルカリキュラムやプログラムの開発ができたか、です。最初に、いまでは7つに増えた各プロジェクトが「どう進んでいるか」「どんな成果があったか」を紹介します。詳細はAG5のポータルサイト (<https://ag-5.jp>) をご参照ください。



**研究テーマ1. 日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発**

香港日本人学校香港校小学部を対象にグローバルな能力を育成するための実践に取り組んでいます。「グローバルクラス」を開設したのは二〇一六年です。四年目に入りました。このクラスの特徴は算数、理科、図工を英語で行う「英語イマージョン」、探究学習を核にした「グローバルスタディーズ」の取り組みです。私たちが懸念していたのは英語力が多様な子供たちが算数や理科を英語で学習すると学力がつかぬのか、学力のばらつきが出てくるのではないかとということでしたが、この懸念は払拭されました。標準学力テストの結果をみても香港日本人学校の他のクラスの結果と遜色のないものです。

香港日本人学校の実践で一九年度に目指したのは「グローバルスタディーズ」の成果をまとめ、他の学校に普及するという作業でした。同校の先生たちで「グローバルスタディーズ単元デザインの手引き」を作成していただきました。小学四〜六年生で学ぶトピックと中心概念が整理され、トピックはSDGsと関連づけられています。SDGsには、国連の加盟国一九三カ国が一六〜三〇年ま

で達成すべき一七の目標が掲げられています。日本国内の学校でも取り組むべき重要な課題です。

この成果は大変貴重ですが、当然ながら学校の置かれた環境に大きく依存します。取り上げられるトピックは学校ごとに違うこともあり、トピックが違えば中心概念も変わってきます。そこで三年間の取り組みをもとに「探究学習のプログラム開発」を行っています。これは、探究学習の目標、内容構成、教材、学習活動、評価などについて具体的な指針を示すものです。

こうした指針をもとにシンガポール日本人学校とバリ日本人学校でも探究学習の実践を始めました。シンガポール日本人学校小学部ではMOSCO (持続可能な開発のための教育)を中心に、「探究科基礎」を実践しています。またバリ日本人学校でも「水」をテーマにした総合学習を行っていますので、現在取り組んでいる「探究学習のプログラム開発」をもとに、各学校で研修を行いました。

新しい試みを実践していくのは先生たちです。探究学習はこれまでの教科学習とは異なり、内容や方法も違いますので、先生たちの理解を深め、どう実践するかについて共有化を図ることにしました。

**研究テーマ2. 日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発**

台北日本人学校、台中日本人学校、高雄日本人学校で日本語指導のプログラム開発を行いました。この三年間で本プロジェクトが目指していた日本語指導プログラムの開発という当初のねらいは達成できたと思います。その成果として、「日本人学校における日本語補習のための学習活動案集—台北日本人学校の実践から—」を刊行しました。台北日本人学校での実践をもとに、日本語指導が必要な子供に対し、小学校低学年のうちに学習するための日本語力をしっかりとつけることを目指したものです。より汎用性の高い内容にして算数、国語、生活科でつまずきやすいところ、支援すれば在籍学級の学習に参加できるところ、今後の学習の基礎になるため確実に押さえておきたいところを取り出し、指導方法をわかりやすく示しました。一年生二十時間分、二年生二十時間分の単元を収めています。日本人学校では日本語指導が未経験の先生が教えるケースが大半ですので、その場合でも指導できるように工夫されています。

台中日本人学校では在籍学級での

日本語指導の視点を取り入れた授業について実践していただきました。その成果も冊子として刊行する予定です。

一九年度は新たにマニラ日本人学校、大連日本人学校、青島日本人学校でも実践しました。マニラ日本人学校では、日本語学級のプログラム開発を開始しました。マニラ日本人学校は週一回放課後に、小学一〜六年生を対象にした日本語学級を実施しています。この日本語学級と在籍学級とが連携した効果的な指導方法の開発について検討を行っています。

大連日本人学校では在籍クラスでの日本語指導の視点を取り入れた授業を行っています。一・四・六年では在籍学級の国語科の授業で、視覚的な支援や表現支援を重視した日本語指導を取り入れて行いました。

また青島日本人学校では、「課外の日本語教室」「取り出しによる個別の日本語指導」「在籍級での日本語指導」に関する取り組みを行いました。担任の先生と日本語指導の先生が連携し、教科内容についてあらかじめ学習したりわからないところを補充したりする実践を行っています。

今年度、私たちが大きな期待をかけたのがマニラ日本人学校を会場にした日本人学校の先生方の合同研修会です。あいにく新型コロナウイルス

スの影響で中国、台湾の一部の先生が来訪できなくなる事態になりましたが、Noonシステムを活用し、フィリピン人の児童生徒が多く住む浜松市の指導主事にも参加していただき実施しました。日本国内とは事情が異なるので、日本人学校の合同研究会は意義があると思います。

**研究テーマ3. 補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発**

ダラス補習授業校を対象にしたプロジェクトは、この三年間で大きな成果がありました。小学校の中学年から開始した単元開発を小学一年から中学生段階までの全学年で行うことができました。本単元は、日本語力も英語力も多様な子供たちが共に学び、その成果を日本語で発信できるようにするためのもの、教科横断型の内容です。実際に、子供たちは授業に積極的に参加し、日本語での表現力は確実に向上しています。

本プロジェクトは補習授業校の先生方に大きな影響を与えつつあります。新しい取り組みはどのように始めていかわからないというのが実情で、それが足かせになっています。そこで、まずはダラス補習授業校の先生

が授業をWEBで公開し、他の補習授業校の先生も交えて振り返りを行うてきました。一八年度はオースチン、クリーブランド、コロンバスOH、シカゴ、シンシナティ、セントルイス、ワシントンDCなどの補習授業校の先生方と一緒に研究を進めました。今年度は実践を共有するために参加校を増やし、現時点(二〇年二月)では、三十五校、八十六名の先生が参加しています。補習授業校のコンソーシアムが構築されつつあります。補習授業校には優秀な先生が多くいますが、こうした力量のある先生のネットワークをつくり、相互に課題を解決できるようにしていくことを目指します。

**研究テーマ4. 南米日系人及び現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発**

本プロジェクトではパラグアイの日系人コミュニティに対して日本人学校がどのような役割を果たせるか、果たすべきかについて、具体的に取り組みを通して検討しています。この三年間、継続して実施しているのが「アスンシオン日本人学校の先生によるアスンシオン日本語学校での国

語や日本語の指導に関する合同研修会」で、一九年度はイグアス等の日本語学校でも行いました。また、一八年度には「移住すろく」を開発し、一九年度には地域学習のための社会科学副読本を作成しました。日本人学校の子供たちの多くは生活空間が限られていて現地についてはあまり知識がありません。そこで役立つのが副読本ですが、アップデートが必要だったので、子供たちの学習に大いに役立つことを期待しています。

また、この副読本では「日本とのつながり」という章を設けてパラグアイへの移住の歴史を取り上げていますが、日本語学校や日系の子供の学習に役立てることをねらっています。漢字にはルビを振り子供たちが学習しやすいように工夫されています。パラグアイには一九六〇年代から七〇年代に移住していった一世の人たちも多く住んでいますので、子供にとつて「移民」というテーマは身近なものです。日系人・日本人としてのアイデンティティを形成する一助になることを期待しています。

**研究テーマ5. 学校図書館を活用した日本文化等の発信のためのプログラム開発**

西大和学園カリフォルニア校の取

り組みは、学校の持つリソースを地域に開放して日本文化や日本語の学習に役立ててもらい、親的な人材を育成することを目指すものです。一九年度も、日本文化を発信するイベントで関連する図書などの開放を行いました。そのような貸し出し方の有効性がわかってきました。

そこで、多様な図書の貸し出しを行いました。オレゴン州ポートランドへはけん玉を添えて、また中学生の交流活動では読み聞かせ音声付きのものを用意しました。さらにポート大学の中島和子教授の講演会や地域住民にお茶を披露した際にも、また近隣にある日系人のシニアの人たちとの交流時や「日本文化祭」等でも図書を貸し出しました。これらのイベントへの参加者数は二二一人に達し、着実に成果を上げています。また、近隣で日本語を教えている現地の先生方への情報や資料などの提供も一八年度から引き続き行いましたが、先生方のニーズが明らかになってきました。「生徒の日本語レベルによっては自分で読めないの」で、英語で解説しながらの読み聞かせが効果的」「簡易な日本語で書かれている図書より、日本文化に関する図解付きの辞典を用いて話題や発話の機会を作り出す指導をした」私

立の中学高校では図書を活用した授業を比較的自由にできる」「大学ではさらに自由にできる」などの意見が上がりつつあります。公立の中学高校を対象にするよりも、私立や大学を対象にすることでこの事業が広まっていくという見解です。今後の事業展開に役立つ内容が明らかになっていきます。

**研究テーマ6. ICTを活用した遠隔での教員研修及び授業実践のプログラム開発**

本プロジェクトは一九年度から始めました。まずは、サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロ、アグアスカリエンテス、サン・ホセの四つの日本人学校合同で先生方のICT、遠隔指導などに関する研修会等を実施しました。サンパウロとリオ・デ・ジャネイロのグループでは、教科化された「道徳」と、新学習指導要領の完全実施に伴い必修化された「プログラミング」についての遠隔合同授業が実施されました。両者とも指導方法に関しては喫緊の課題ですが、教師の専門性を生かしたリーダーシップ溢れる実践がみられました。またアグアスカリエンテスとサン・ホセのグループは、子供たちの遠隔力の向上を目指して交流会の遠

隔合同授業を実施しました。異なる環境下で学ぶ子供同士の多様な意見交換は意味がありますが、子供たちの中に「積極的に発信していこう」とする姿勢の芽生えがみられました。一方、遠隔授業を円滑に行うには、LMS環境、ICT機器の活用など課題も多いため、実証的実践を行い、次年度以降の課題を抽出しました。

**研究テーマ7. 日本人学校における特別支援教育に関する遠隔指導実施に向けた実践的研究**

特別支援が必要な子供を帯同しての海外赴任が増加している中、一九年度から開始されたプロジェクトです。日本人学校が発達障害等の児童生徒の受け入れに前向きに取り組めるよう、国立特別支援教育総合研究所と共同で遠隔指導システムの開発に取り組んでいます。

筑波大学附属大塚特別支援学校や東京都立調布特別支援学校の協力をいただき、ハノイ日本人学校と北京日本人学校において遠隔アプリ「Z-Cube」等を活用して学級支援を試みています。

一九年度は、システム環境を整備し、指導支援対象者への指導方法等に関する教員研修を支援学校による遠隔会議等を通して実施しました。

**新しい取り組みを進めるには**

本プロジェクトも折り返し(五年を想定)を過ぎ、他校への普及を図っていく必要があります。二〇年度はヨコ展開を進め、多くの日本人学校等で実践可能なモデルの構築を目指します。そのためには次の四点が課題です。①新しい教育を進めるための実践に裏打ちされた具体的到達目標の明確化。②適切なガバナンス(日本人学校の先生の任期は原則二、三年。学校の意思決定を行う運営委員も一年単位で代わるのも珍しくなく、「継続」にはマイナス。改革には「継続できる位置づけ」が必要不可欠です)。③成果の評価方法(中でも実践レベルでの評価が大切です。学力といった定量的指標から、思考力や表現力などの伸びはポートフォリオ(成長の記録)などを活用して評価する必要があります。英語力や日本語力などは作文などを通して伸びを評価していきます。ルーブリックなどの評価指標も活用できるように)。④先生方のモチベーション(先生方の主体的な参加が不可欠です)。

共通の目標を持ち、達成のために自ら協働していくことで改革は進みます。その意味でAG5では先生方の研修会をサポートしていく所存です。

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## 「日本人学校の特別支援教育における遠隔指導」実践的研究

国立特別支援教育総合研究所 研究員 伊藤由美

2020年4月現在、海外には95校の日本人学校があり、およそ2万人の子どもが在籍しています。文部科学省と国立特別支援教育総合研究所が2018年5月に実施した調査によると、特別な配慮を要すると判断された子どもの数は760名という結果でした。これは日本人学校に在籍する子どもの数の3.8%にあたる結果になります。文部科学省が国内の通常の学級に在籍する子どものうち6.5%に発達障害の可能性があると報告していることを考えると、日本人学校は、特別な配慮を要すると判断された子どもが国内に比べて少ないといえます。しかし……。

### 支援ニーズのある子どもの 受入れ困難にある背景

こうした状況の背景について、国立特別支援教育総合研究所は、日本人学校における特別支援教育の推進状況について二〇〇九年に調査をおこなっています。

その結果、支援ニーズがある子どもの入学希望はあるものの、「入学を許可していない」あるいは「障害の種類を限定していたり、通常の学級で授業が受けられることを前提にしていたり等、入学要件を設けている」という学校がほとんどで、条件なく入学を許可しているケースは全校の九パーセントしかありませんでした。これは、特別支援学級や通級指導教室といった個に応じた指導をおこなう場が設置されていないという状況が大きな理由でした。

現在、日本人学校の数は十年前の八十八校から七校増えています。しかし特別支援学級を設置する日本人学校の数は変わっていません。こうした状況は、通常の学級で一斉授業に参加できることが入学条件とされている現状につながっているといえます。

また日本人学校では、文部科学省からの派遣だけでは不足する教員を

各校が独自に募集する「現地採用」制度で補っている現状があります。そのため教員の中には十分な指導経験がなく、支援ニーズがある子どもに対して適切な指導・支援の方法が分からなかったり、障害の状態によっては学級経営がうまくいかなくなったりしている可能性が考えられます。

これは、指導を受ける側の子どもや保護者にとっても、指導をおこなう側の教員にとっても非常に厳しい状況といえます。

### 本事業に取り組んだ理由

日本人学校のある地域であっても、障害のある子どもを帯同して海外に赴任することは、保護者にとつて先に述べたような厳しい入学状況があります。さらに、日本人学校は現地の支援を受けるには難しい状況にあるほか、国外に設置されている私立学校であることから、日本国内の公的機関（教育センターや医療機関など）を利用することができません。

しかしながら、支援ニーズのある子どもが日本人学校に入学できなかつたり、入学しても適切な指導や支援がおこなわれなかつたりしたら、子どもにとって不利益をもたらしかねません。そのうえ赴任を決めた保

護者に対しても、帯同したことを後悔させてしまうかもしれません。また日本人学校に在籍する子どもの多くが、将来日本に帰国する可能性があります。そのため、日本人学校に入って個別の指導計画や個別の教育支援計画が引き継がれることは帰国後に支援の連続性が担保されることにもつながります。

帰国後までを見通して支援が受けられることは子どもにとつても、さらに障害のあるお子さんを帯同して赴任する保護者にとつても大きな安心につながります。

そこでAG5の取り組みの一つとして、国内の特別支援学校から遠隔による支援を受け、日本人学校の教員が安心して支援ニーズのある子どもの指導に取り組めるよう、その条件整備と実施方法の整理に取り組むことになりました。

### 本事業の実施体制

本事業は国立特別支援教育総合研究所が中心となり、海外子女教育振興財団と連携を取りながら推進しています。北京日本人学校とハノイ日本人学校を研究提携校として、筑波大学附属大塚特別支援学校と東京都立調布特別支援学校を研究協力校として共に取り組んでいます。



ハノイ日本人学校

研究提携校に北京日本人学校とハノイ日本人学校を選定したのは、日本との時差が少ないことが大きな理由です。さらに、本事業に関する提携の打診をしたところ、発達障害の診断がある、もしくは可能性があると思われる子どもが在籍している、「指導・支援の方法を学びたい」と考えている学校であったことも理由でした。また、本事業の趣旨を学校長に理解をいただけたことは大きな後押しになりました。

国内からの研究協力校を特別支援学校としたのは、特別支援学校は全国に一三五校設置されていること（文部科学省二〇一八）に加え、特別支援学校の特別支援教育コーディネーターは近隣の小中学校への支援（コンサルテーション）もおこなっている、その知見やスキルを日本人

学校への支援にも生かすことができるとは思いません。次年度実施した事業の内容について紹介させていただきます。

### 二〇一九年度の取り組み

二〇一九年は、本事業の土台をつくるため、日本人学校への遠隔支援導入に向けた準備と実施課題の整理をすることを目的に、国内および海外の遠隔システムを確認したり必要機材を購入したり等、運営の基礎を構築したほか、主に次の三つについて取り組みました。

1. 特別支援学校の状況把握と調整
2. 日本人学校の状況と支援ニーズの把握
3. 遠隔支援および訪問支援を通してマニュアルに含める内容の整理と資料案の作成

### 1. 特別支援学校の状況把握と課題

今年度は国立大学附属の特別支援学校として筑波大学附属大塚特別支援学校、自治体が設置する特別支援学校として東京都立調布特別支援学校を研究協力校として、設置母体による実施状況の違いと共通性を整理しました。

その結果、両校ともに共通していた状況は「通信」面の課題でした。遠隔支援を実施するうえで通信回線の使用は必要不可欠なものです。しかしながら、研究協力校では校内業務以外の目的で通信回線を利用することに制限があったことから、校内で実施する際はWi-Fi回線を持ち込む等の対応により事業を実施することとなりました。

今後、特別支援学校の参加を拡大していくためには、「校内のネット回線の状況を把握すること」や「回線利用に向けて必要な対応方法を整理しておくなくてはならない」ことが明らかになりました。

### 2. 日本人学校の状況と支援ニーズの把握

(1) 学校のニーズへの対応について

二つの研究提携校とも、教育的ニーズのある子どもが在籍する状況にあることは共通していました。しかしながら、校内支援体制の違いから遠隔支援に求めるニーズは少し異なります。そのため、両校と情報交換をする中で、それぞれ異なるニーズへの対応について検討をおこないました。その結果、対象となる子どもが在



筑波大学附属大塚特別支援学校での遠隔支援の様子

籍する学級へのコンサルテーションをおこなうための時間を確保すると共に、不定期に入る相談の依頼にも対応できるよう、クラウド上に遠隔支援の予約システムを設置することになりました。

このシステムは「特別支援相談予約システム」（仮称）と命名され、特別支援学校の対応枠を調整しながら、次年度以降、海外子女教育振興財団の運営で稼働していくこととなりました。図（次ページ参照）に示した方法を想定しています。

### (2) 通信回線への対応について

会議や学習会で回線状況を確認しながらすすめたところ、中国の通信環境が安定しておらず、リアルタイムでは授業の様子を送信することが難しいことが分かりました。

また日本人学校では校内回線を使用して授業をおこなっていることから、コンサルテーションのために長時間回線を使用することは授業に支障が生じ、難しいことも明らかとなりました。

一方で、特別支援学校側から「事前に授業の様子が分かるような資料があると支援がスムーズにおこなえる」という意見が出ていました。そこで、資料をクラウド上で事前に共有し、授業者も参加してコンサルテーションをおこなうことが効果的ではないかということになりました。今後は、セキュリティ上の安全性を担保しつつ、スムーズに通信のできるアプリ使用の検討もしていく予定です。

**本事業の成果として期待されていること**

本事業では、日本国内から日本人学校への遠隔支援を実施するためのシステムを構築すると共に、そのシステムを使用した具体的な支援の方法をマニュアルにまとめていくことが期待されています。

今年度はコンサルテーションを実践したほか、学校、学級、対象となる子どもの情報を共有するために基本情報を整理するシートや、コンサル

テーションの経過と成果を確認するための実践シート等を作成しました。今後はこれらのシートをリバイズし、マニュアルの一部として加えていく予定です。このほかにもマニュアルには、①遠隔支援により対応可能な支援内容の提示、②コンサルテーションの方法（相談予約システムの利用方法）実施方法の調整と実施（終了までの流れ）、③遠隔支援をおこなった事例などを含めていくことを考えています。

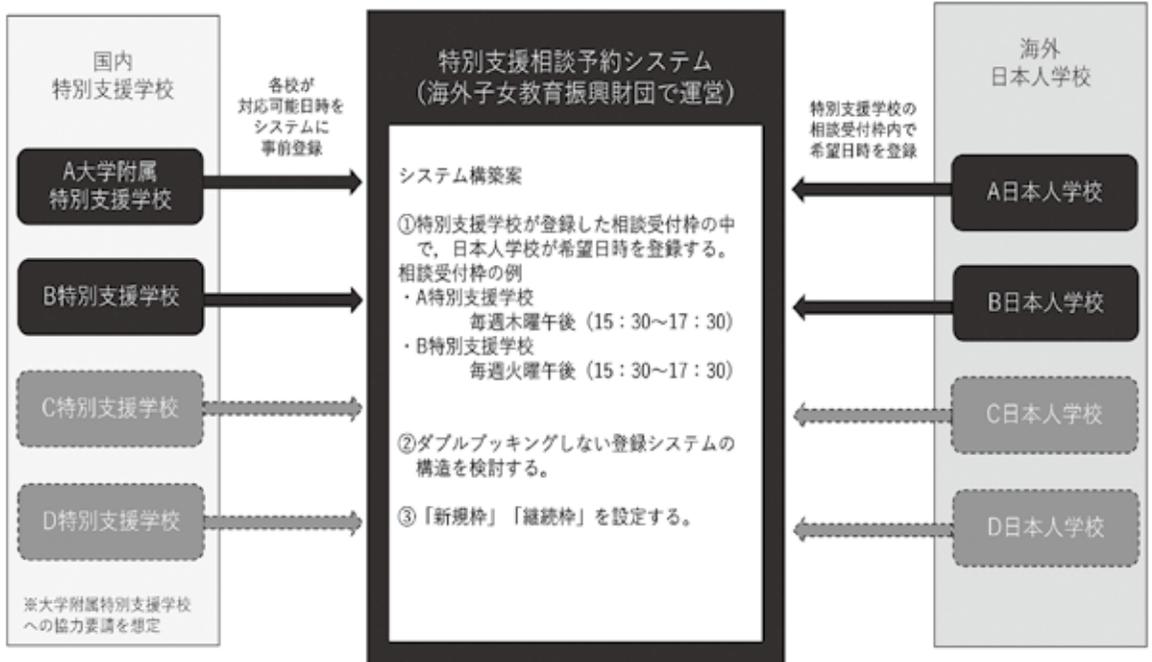
二〇年度は本事業に取り組んで二年目となります。成果を他の日本人学校にも普及できるようにデータを収集する重要な一年となります。

日本人学校の先生方の声を受け止めながら、特別支援学校の先生方と共に取り組んでいきたいと考えています。



北京日本人学校

**特別支援相談予約システム(仮称)**



# エー A G 5 だより

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## 補習授業校は止まらない

AG5運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談員 佐々信行

新型コロナウイルスの感染が世界に広がり、多くの学校が突然の休校を余儀なくされました。補習授業校も例外ではありません。これまでに例のない緊急事態に、生かせる経験もなく、先行きの見通しが立たない中で、補習授業校はさまざまなアイデアを動員して対応しています。先生、保護者、運営委員など、関係する方々の素晴らしいチームワークが見られています。

### はじめに

三月になって、アジア、北米、ヨーロッパのほとんどの国で、新型コロナウイルス感染症対策として学校を閉鎖する措置がとられました。

補習授業校のほとんどが借用校舎で授業をしていますので、授業を継続することは物理的にも不可能になりました。正規の学校ではないので、当面休校でも仕方ないところかもしれないませんが、多くの補習授業校は素早く体勢を整え、子どもたちに学習を続けさせました。海外に住む子どもたちにとって、補習授業校は週に一回であっても日本語で生活し、日本語で学ぶ貴重な機会です。それに替わるものはありません。補習授業校が驚くほどのスピードで対応したのは、先生方、保護者の方々、運営に関わる皆さんが補習授業校をかけたえのないものだと考えていることの現れだと思っています。

### 最初の情報交換会

AG5では、二〇一九年度までにたくさんさんの補習授業校の先生方と一緒に研究を進めてきました。本年四月五日、その先生方が所属する補習授業校に声をかけ、「AG5補習授業校情報交換会(ウイルス対応策)」

を開きました。三十六校五十六人の先生や管理者の皆さんがオンラインミーティングに集まりましたが、この時点で、すでに多くの補習授業校が具体的な方策を実施していました。郵便やEメールでの教材や課題の送付。

- ・ オンライン授業の実施。
- ・ 電話やオンラインでの個別指導。
- ・ ビデオ授業の配信。
- ・ オンラインホームルームの実施。

どんな方法が考えられるか、どんなツールが使えるのか、どんな問題点があるのか、たくさんさんの報告と活発な質疑応答がありました。

いくつかの補習授業校は登校できない間の方針をすでに文書に示していました。これから方針を示さなければならぬ学校にとってはありがたいお手本です。また、オンライン授業を試みた先生からは気づいた利点や問題点の報告がありました。参考になるウェブサイトのリストはA4で五ページにも及びました。

この時点では、登校できないのは四月いっぱいぐらいではないかと多くの補習授業校が予想していたようです。しかし事態は深刻になり、多くの地域で借用校舎が夏まで使えないことが決定的になりました。流通が止まり教科書が届かない、教科書

の保管先が立ち入り禁止になり教科書を配付できない等の悩みを抱える補習授業校もありました。

### シリーズになった情報交換会

第一回情報交換会はアメリカの話が中心になったので、次回はヨーロッパ地区の情報交換をという要望があり、第二回は四月十三日に「ヨーロッパ地区補習授業校情報交換会」を、そして、その後オンライン授業の難しさが浮かび上がったことから第三回は四月二十二日に「オンライン以外の選択肢」をテーマに開催しました。各校の取り組みが進み、経過報告や実践報告を交えた活発な情報交換が行われました。国や地域によっていくらか違いはあるものの、休校期間が長くなることを覚悟しなければならぬ状況になりました。その間の対応策として、遠隔授業やオンラインでの行事の実施が話題の中心になりました。

〈オンラインミーティングシステムの活用〉

- ・ 子どもたち同士のコミュニケーションにも便利。
- ・ どのシステムを利用するか。
- ・ 家庭のIT環境が十分でない場合がある。
- ・ 兄弟姉妹がいる場合、複数のデバ

イスが必要になる。  
慣れていない先生のトレーニングが必要。

### 〈録画配信を活用する〉

- ・再生して見るだけならスマホでも十分。どの家庭でも対応できる。
- ・ネット環境に左右されることが少ない。

- ・子どもが何人いても、時間をずらして利用すればよい。

- ・途中で止めたり、繰り返し再生したりしながら学習を進められる。
- ・録画でも子どもは自然に反応する。

- ・原則として欠席は生じない。

### 〈LineやSkypeなどの音声電話やテレビ電話を利用する〉

- ・児童生徒一人ひとりのつながりを持つことが大事。

- ・練習しなくてもすぐ使える。

他校の例を参考にしながら各校でそれぞれの実情に合わせて体制の整備が進みました。形は違っても、ほとんどの学校で何らかの形でＩＴを活用する対応になりました。

ＩＴ企業に勤める保護者がシステムの設定や先生たちのトレーニングを引き受けるという、補習授業校らしい展開もありました。四月の終わりごろまでには、多くの補習授業校で新年度の授業が始まりました。

オンラインで始業式や入学式を行

った補習授業校もありました。子どもたちはモニターの前で返事したり校歌を歌ったりして、日本の学校文化の一端を体験できたようでした。「登校しない」授業で保護者の理解が得られるか、退学する児童生徒が出るのではないかという心配もありましたが、保護者の反応は概ね肯定的で、このために退学するというケースはほとんど見られませんでした。逆に、帰国や転居のために一度退学した子どもが、離れた場所からオンラインで一緒に授業を受けているという楽しい報告もありました。

### 経験を踏まえて

いくらか経験が蓄積され、五月五日の第四回「今伝えたいこと、聞きたいこと」、五月十三日の第五回「遠隔授業と『評価』」では具体的な話し合いになりました。オンラインミーティングのツールを使いこなすための技術的な情報交換もあり、自校のために作成したマニュアルを提供してくれる学校もありました。

実践していく中で、遠隔授業の難しさや問題点も指摘されるようになりました。

- ・授業の準備をするのに先生たちに大きな負担がかかっている。
- ・子どもが長時間モニターを見続け

ることで健康に問題は起きないか。子どもたちの学習への取り組みに関する評価はどうしたらよいか。

- ・遠隔授業でテストはできるのか。
- ・遠隔授業で登校しての授業と同じように成績をつけることは妥当か。
- ・運動会のようにみんなが楽しめる行事を工夫することはできないか。

遠隔授業の評価について考えることで、「そもそも評価とは何か」を考え直す機会にもなりました。

日本国内では長期間の休校に伴う「学習の遅れ」をどうするかが問題視され、来年度の学年開始を九月にする案等が取り沙汰されるようになりました。補習授業校では「形は違っても学習は進めている。登校が可能になったら年間計画のその時点の学習から授業を進める」という方針の学校が少なくありませんでした。

### 新しい方法の発見

遠隔授業について考えたり試したりして分かったことは「教室の授業に取って代わるものではない」ということです。コンピュータの画像と音声で伝えられるものは限られず。教室という一つの空間で三六〇度の空気を感じながら伝えられるものとは比べものになりません。

教室に集まるときにはオンライン

ンもビデオも使わないでやっていくるので、遠隔授業の経験のある先生は多くありませんでした。ところが、必要に迫られて取り組んでみると、遠隔授業には、教室では不可能なことができる利点もあることが分かってきました。

ある先生は、教室ではほとんど発言することのない子どもが、オンラインの授業では声を聞かせてくれることに気がつきました。みんなの前に立つと固まってしまつて声が出せなくても、オンラインでは実際にそこにいるのは自分一人だし大きな声を出す必要もないので、かえって話しやすいようになるようです。

ある補習授業校では、同学年の二つのクラスを合わせて、二人の先生が指導するという方法を試しました。一人が授業を進めている間にもう一人の先生は児童生徒一人ひとりの様子を見ることにしました。すると、一人で授業しているときには気づけなかった子どもへの反応に気がついたり、授業が進んでいる間に個人的な質問に答えることができたりして、いつもと違う授業の展開になったそうです。普段は二人の先生が国語と算数のそれぞれの授業の準備をするところですが、一つずつの準備で済むので効率的な一面もあるとのことでした。

ある中学生は、普段の国語の授業ではなかなかみんなのスピードについていけなくて日本語に自信を失いかけていました。ところが、ビデオ授業になると、自分のペースで学習を進めることができ、自分の日本語がかなりのレベルにあることが再認識できたようです。この生徒はハイスクールで「AP Japanese」を選択し、日本語を自分の強みにしていこうと決心し、先生に「ビデオ授業がなかったら私は多分日本語をあきらめていた」と語ったそうです。

遠隔授業のさまざまな方法は、「教室の授業の代用」ではなく、それ自体を新しい教育の方法と考えると、教室の授業が再開してからもいろいろと生かしていけそうです。

またICT教育という費用がかかりそうなイメージがありますが、工夫次第でありお金をかけずにできることが結構あるのです。「写メの活用」などはその代表でしょう。

**その先につなげる**

情報交換会の資料はその都度AG5のウェブサイトで公開しています。情報交換会に参加されなかった学校からも「参考になった」という声が届いています。参加者たちは、力を合わせることで道を切り開くことが

できることを実感しました。

お互いにもっと知り合いたいということで、第六回は少しリラックスして「元氣の出る話」を聞き、グループで自由に話し合う会にしました。遠隔授業をやってみた手応えを話してくれた人もあれば、ネコ自慢・イヌ自慢の楽しい話もありました。毎朝森を散歩するというスイスからの話はみんなをうらやましがらせました。この回から少人数で自由に話し合う時間を設けました。先生たちは、場所も規模も違う別々の補習授業校で働いていますが、「日本語で子どもたちを育てる」という同じ目的を持つ一体感を共有しました。

オンラインミーティングでの距離を超えた交流はウィルス対策に限らず、補習授業校の先生たちの大きな力の源になるにちがひありません。補習授業校情報交換会は次の点にも配慮し、参加者の輪を広げながら継続していきたいと思えます。

- ・関心の高いテーマは、繰り返し話題にしてい
- ・直接関わっている人が少ないテーマも積極的に取り上げていく。
- ・出席者同士が知り合い、親しくなることを目的とする活動も取り入

れていく。

なお、日時やテーマ等の詳細は、「補習校教員交流Facebook」でお知らせします。

**悪いことばかりではない**

AG5では、一八年からオンラインミーティングで研究会や報告会を行ってきました。課題の一つは、補習校の先生方にまずそのミーティングに接続していただくことでした。何事も最初の一步を踏み出すには気持ちの面で一つのハードルを越えなければなりません。コンピュータの向こう側に誰がいるか分からないという一種の恐怖感の克服も必要です。ところが新型コロナウイルスによる緊急事態になり、子どもたちのためには躊躇している場合ではないと、世界中で多くの先生方が一気にハードルを越えました。情報交換会参加者の累計は二回目で百名を超え、今も増えつづけています。

AG5で二〇年度に計画している「学習活動計画の作成」「初任者研修会」などの事業にもたくさんの方々に参加していただいています。参加者の所属校はアジア、オセアニア、アフリカ、ヨーロッパ、北米、中南米と世界中に広がっています。ある校長先生が、「この危機を通

して、先生、保護者、運営委員など皆さんの結びつきがさらに強くなりました」と話しておられました。補習授業校の危機はまだ終わっていませんし、また新たな危機がやってくるかもしれません。しかし、このチームワークがあれば、危機に負けないだけでなく、そこから新しいものを生み出していくこともできるでしょう。補習授業校は止まりません。

- 〈参照ください〉
- AG5ウェブサイト
- <https://ag5.jp>
- AG5 補習授業校情報交換会資料
- <https://ag5.jp/post/detail/13>
- 補習校教員交流Facebook
- <https://www.facebook.com/groups/166412650300837/>

遠隔授業と「評価」

各年の開校時刻  
2020年5月13日(水)

USハワイ	4:00AM
US太平洋	7:00AM
US山形	8:00AM
US甲府	9:00AM
US東京	10:00AM
東京圏	2:00PM
中国一ツ橋	
仏島等	4:00PM
(伊東ヨーロッパ)	
タイ等	9:00PM
中国等	10:00PM
日本	11:00PM

マイクのミュートを解除して  
お話しください。

＜画面の設定＞  
右上/左上のボタンや画面スワイプで切り替わります。

スピーカー・ビュー  
話している人全員が見えます。

ギャラリー・ビュー  
多くの参加者の表情が見えます。

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## サンパウロ日本人学校における「遠隔」研究の取り組み

サンパウロ日本人学校校長 曾川和則



日本とは地球の真反対に位置するブラジルにあっても、今や日本の出来事や情報がリアルタイムに獲得できます。情報通信技術（ICT）の発達はめざましく、地球の隅々までインターネットで結ばれ、どこにいても人と人とのコミュニケーションが可能な新時代を迎えています。まさに、グローバルな社会の到来です。

本校はこの時代の要請を受け、高度グローバル人材育成を目指し、「サンパウロ日本人学校」ならではの「遠隔」研究に取り組んでいます。ご紹介しましょう。

### はじめに

このような時代にあつて、世界各地の在外教育施設が有する人材や地理的環境を活かすことで、高度なグローバル人材育成に大きな役割を担うことができます。

サンパウロ日本人学校（以下、サ日校）には、日本各地から教育の未来を担う優秀な教師が集い、地球の未来を創る優れた人材を育成しています。グローバル化が進行し、ICTの有効活用が求められる現代、日本の真反対にある本校が先陣を切り、「遠隔」をキーワードに先進的プログラムを開発・提供することは在外教育施設や日本国内の学校の新たな学びの発展に一石を投じることになるでしょう。そのゴールに向かって、今、サ日校は動き始めています。

### 本校の実態と児童生徒の様子

#### （1）本校の実態

一九六七年に児童数二十八名でスタートした本校は、今年度で五十三年目を数える歴史と伝統があります。一九七四年に現在のカンポリンポの地に移転し、世界の日本人学校の中でも十二万平方メートルという広大な敷地を有する学校です。全盛期の一九八〇年代初頭には、九〇〇名を

超える子どもたちが在籍していました。その後、児童生徒数は大きく減少し、ここ数年は一五〇〜二〇〇名の規模となっています。

昨年度四月当初は一六九名からのスタートでした。今年度四月当初は、児童生徒併せて一五七名の在籍であり、小学部一年生が二クラス、小学部二年生と中学部は各学年一クラスの学級編成となっています。

#### （2）児童生徒の様子

中南米の拠点都市として機能するサンパウロには、日本から多くの企業が進出しています。駐在員の任期は約三年で、帯同する子弟が在籍し、本校校歌に歌われるように「今日もカンポリンポの丘に立ち」「ここにわれらあり」「ここに希望あり」の学びを積み重ねています。しかしながら、昨年度末に発生した新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、本校においても、ブラジルを離れて日本へ一時帰国する家庭が増加しています。五月末現在においては、一三七名の在籍者の内、七十六名が二重国籍等の制度を活用して日本へ帰国し、サンパウロに残っている児童生徒数は六十一名となっています。ブラジル国内でコロナ禍が深刻化する状況を受け、この傾向は今後も強まるものと思われれます。

### AG5の研究への道

#### （1）研究のスタート

「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（AG5）」を文部科学省から委託された海外子女教育振興財団より昨年五月、サ日校に研究依頼がありました。AG5は在外教育施設特有の課題の解消並びに高度グローバル人材の育成を目的としています。依頼されたのは、日本人学校の教育の質をより一層高めるために、ICTの「遠隔」技術を活用するという実践です。具体的な研究の自身は次のとおりです。

- ・近隣にあるリオ・デ・ジャネイロ日本人学校と連携した合同研究
- ・遠隔での教員研修による教員の質の向上を図る研究
- ・遠隔による合同授業による多様な人々とのつながりを実現する教育の在り方の研究

・日本人学校で必要とされる遠隔教育に係る取り組み

この「遠隔」研究は、本校を含め中南米にある次の四つの日本人学校に託されました。

- ・アグアスカリエンテス日本人学校（メキシコ、以下AC）
- ・サン・ホセ日本人学校（コスタリカ、以下SJ）

・リオ・デ・ジャネイロ日本人学校  
 (ブラジル、以下RJ)  
 ・サンパウロ日本人学校(ブラジル、  
 以下SP)

合同研究は「AC」―「SJ」間、及び「RJ」―「SP」間とされ、四校合同研究の方向性も示されました。新たな時代の新たな可能性を見出すサ日校の「遠隔」研究はこうしてスタートしたのです。

(2) 研究の柱立て

AG5から指定を受けた研究テーマは、「ICTを活用した遠隔での教員研修および授業実践のプログラム開発」です。私たちはこのプロジェクトを立ち上げるにあたり、その柱となる目的や内容を明確にした「計画」づくりに取り組みました。

まずは校内での構想です。新学習指導要領への移行期にあたり、本校では独自に「特別の教科道徳」に焦点を当て校内研究をスタートさせていましたが、多様な考えを引き出し、討論し、価値を見出す道徳に「遠隔」が生かせないかと考えました。

次にRJとの打合せです。六月、RJの校長先生と研究主任を本校に迎え、互いの計画の擦り合わせを行いました。そこで確立した研究の目的は、「日本人学校における高度グローバル人材の育成をめざし、日本

人学校の教育の質を高めることを目的に、他の日本人学校と連携して、遠隔操作による教師研修や合同授業を実施し、その評価、成果も含めてプログラムを開発する」です。

このゴールを目指し、研究一年目は、SPが道徳、RJが総合的な学習の時間やプログラミング教育を通しての「遠隔」研究に取り組みこととしました。そして、互いに教員研修や合同での遠隔授業の場を仕組み、研究成果や課題について検証していくこととしました。

研究の実際

(1) 遠隔環境整備と通信実験

具体的な研究の初段階として、まず取り組んだのは、「遠隔」の環境整備です。インターネット回線の確認や遠隔通信に必要な機器を洗い出し、研究委託金を活用しながら整備を図りました。しかしながら、ブラジル国内では必要とする機材を確保することがなかなか難しく、当面は個人所有の通信端末からの通信実験を並行して行うこととなりました。七月、RJ―SP間での通信実験(ZoomやSkype等の活用)に取り組み、互いに顔を合わせ、学校や職員紹介から合同研究が始まりました。ここでは六月の打合せで立てた計画を両校で

確認し合い、二学期からの相互交流や遠隔授業の可能性・実現について共通認識を深め合うことを目的としました。

(2) 合同遠隔教員研修

九月、AG5事務局より本研究のコーディネーター及び講師決定の知らせがあり、本プロジェクトの推進体制が構築されました。同時にRJ―SP間と日本のAG5本部とをZoomでつないで開催された合同遠隔教員研修では、明治大学の岸磨貴子先生に「遠隔」のよさや機器購入についての助言をいただきました。また、十月に開催された四校合同の遠隔教員研修では、中南米にある四つの研究校のつながりを築くと共に、岸先生から「遠隔授業の概要及び本プロジェクトの進め方」の講義をいただき、これから取り組む遠隔授業のイメージを描き出すことができました。中南米四校が合同研修を重ね合うスタートとして、未来の新たな授業「遠隔」のモデル発信に強い決意を深め合った瞬間でもありました。

(3) RJ―SP合同の取り組み

十一月、RJ―SPの両校がまず取り組んだのはRJを主催とする「プログラミング教育」の教員研修でした。RJの研究主任を講師とし



RJ―SP合同遠隔授業「プログラミング学習」

て、実際に私たち教師が「プログラミング」の模擬授業を体験し、子どもたちの指導に活かしていく手法を学び合いました。

十二月には、中学部三年生及び小学部五年生で「プログラミング」をテーマとする合同遠隔授業を仕組み、遠隔での授業の進め方や授業の成果課題を検討しました。

この授業は、「ゲストティーチャー型」と称され、RJにいる講師とテレビ会議システムを使って行う授業です。多様な専門を持つ方々に遠隔で授業をしてもらうことで、児童生徒の専門的な知識が増え、自分たちの世界を広げることができそうです。

しかし一方通行の授業となり、互いの考えを深め合うという点では課題が生じました。そこで、本校が主催し提案したのは「合同授業型」の道徳授業。テレビ会議システムを使い、離れたRJとSPの教室をつな

げて同じ内容の学習に取り組むという交流を意図したものでした。

#### (4) R J - S P 道徳遠隔授業

一月、S P 小学部五年生とR J 小学部五・六年生を遠隔でつないで「道徳」の合同授業を実践しました。学習の主題は「同じ地球に生きている（国際理解・国際親善）」です。教材には「同じ空の下」（新しい道徳五東京書籍）を取り上げました。

道徳の授業のポイントは子どもの考えが深まる中心発問の場面です。遠隔授業としてのポイントもこの場面に設定してワークシヨップの交流活動を仕組むなど、児童の多様な考え方を導き出す工夫をしました。

学習のふり返り（評価）については、合同遠隔教員研修で岸先生に教えていただいた「ルーブリック評価」（学習の達成度を表を用いて測定する評価方法）を活用しました。個々の児童がそれぞれに目標を設定することで、交流と学習のめあてを意識して取り組むことができました。

しかしながら互いの考えにふれるというよさを実感したものの、ワークシヨップでの交流の場面では、それぞれの考えを紹介し合うことに終始し、考えを深め練り合うという点で課題が生じました。通信のタイムラグによるストレスが子どもたちの



R J - S P 合同遠隔「道徳授業」

反応を鈍くしているという指摘もあります。価値の葛藤に迫る指導技術も必要とされ、考えを深め合う道徳での遠隔授業としては、「いつ」「どこで」「何をねらいとして」「遠隔交流を仕組むかが大きなポイントとなる」ことが授業後の研究協議会で出されました。

#### 講師による学校訪問

研究一年目のまとめの時期となる二月、A G 5 事務局の後藤彰夫先生と葭和宣先生が来られました。目的は「遠隔」研究の進捗状況や課題についての共有と今後の取り組みの方向性を見出すことです。

お二人には本校の実態を見ていただき、子どもや職員にも励ましの言葉や助言をいただきました。教員研修の中では、「遠隔」研究の概要や重要性を示していただき、今の本校の研究が今後の教育の未来に大きな力

となることを改めて確信することができました。

その後の四校合同遠隔教員研修では、岸先生に児童生徒のふり返りの支援としてシンキングツールやパターンランゲージなどを紹介していただきました。評価の指標であるルーブリックと併せ、「遠隔」をキーワードとした授業づくりへの大きなヒントと方向性を得ることができました。

#### 「遠隔」による本校独自の実践

二月以降、世界各地で新型コロナウイルスが猛威を振るい、国や地域を越えた人の移動が制限される緊急事態となりました。サ日校でも、高校受験のため十二月末に帰国していた生徒がブラジルに帰ることが難しい状況となりました。卒業式は三月十二日。生徒にとっては一生に一度の中学卒業です。そこで日本とサ日校をICTでつなぐことで、その生



卒業式の日に行われた日本との「遠隔卒業式」

徒にもリアルタイムで卒業証書を渡し、サンパウロの卒業生として喜びを分かち合うことができました。「遠隔」研究に取り組んできたからこそ成し遂げられた晴れ舞台です。

新年度、コロナ禍により学校再開の見通しが立たない中、本校が始業式や入学式をオンラインで挙行し、学校を動かしていること、子どもたちの学力保障のためにオンライン授業を継続できていることは、「遠隔」研究に取り組んできた自信と実績があるからに他なりません。

#### 今後に向けて

研究二年目に入る今年度は深化を図る年です。学びを水平的に広げていく「遠隔」のよさをどこにどう活かすべきか、その事例を提供することがゴールです。

同じブラジルにある共通点と同時に相違点も多いR J とS P が共に求める「子ども像」を確立しながら、「遠隔」で付けたい力を具体化していきたいと考えています。

コロナ禍にあっても前向きに生きる子どもたち、日本とブラジルの架け橋となって世界に羽ばたく姿を思い描き、遠くにいてもつながり合う高度グローバル人材の確かな育成をめざし、さらに挑戦を続けます。

エー  
A G 5 だより在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)アスンシオン日本人学校における教材開発と  
社会科副読本の作成

AG5 研究員・中央大学教授 森茂岳雄

日本から直線距離（航空距離）で約18,000km離れた地球の反対側にあるパラグアイ共和国の首都アスンシオンに、AG5プログラムの拠点の一つである在外教育施設「アスンシオン日本人学校」があります。同校におけるAG5の研究テーマは、「南米日系人及び現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発とそのための教員研修プログラム開発」です。今月のAG5だよりでは、その一環で行われた「アスンシオン日本人学校における教材開発と社会科副読本の作成」についてご紹介します。

一 アスンシオン日本人学校  
の研究テーマ

現在、パラグアイにはアスンシオン、シウダー・デル・エステ、エンカルナシオンなどの都市のほか、地方の六つの日本人移住地（ラ・コルメナ、チャベス、ラ・パス、ピラポ、イグアス、アマンバイ）を中心に七〇〇〇人を超える日系人が暮らしています（パラグアイ日本人会連合会人口センサス参照）。本プロジェクトでは、これらの日系人コミュニティや、日本型教育の発信・普及を行っている他の教育施設に対してアスンシオン日本人学校がどのような役割を果たしているかが課題となっています。「他の教育施設」とは、上記九つの日系コミュニティにある日本語学校、及びアスンシオンにある「日本型教育」を行っている私立学校である日本パラグアイ学院とニホン・ガッコウです。この二校に通う子ども達のほとんどが非日系パラグアイ人です。本プロジェクトの初年度（二〇一七年度）は、これらの教育施設の見学や、当該施設の教員を対象にした授業力アップのための研修（日本での研修を含む）を通して、日本人学校と他の教育施設とのネットワークづくりが行われました。これらの経

験を通して、日本語学校をはじめとする現地の教育施設では、次のような教育のニーズがあることがわかりました（AG5研究レポート参照）。

- ① 教師の力量形成
- ② 日本型教育の提供
- ③ 日本人学校とのネットワーク形成
- ④ 新しい適切な教材の開発
- ⑤ 日系人子弟向けの独自教材の開発

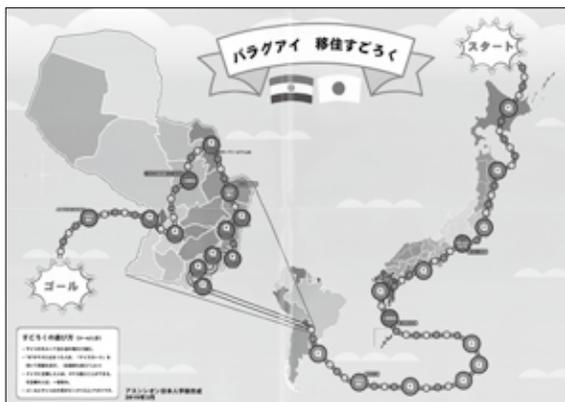
これらは大きく、「日本人学校と連携した教員研修を通しての『日本型教育』の提供と教師の力量形成」及び「日本人学校の子ども達と日本語学校の日系人子弟が共に学べる移住学習のための教材開発」の二つにわけられますが、ここでは主に後者の課題について述べたいと思います。

## 二 移住学習のための教材開発

日本とパラグアイのつながりを考える上で、日本人移住者の存在は欠かせません。一九三六年、日本からパラグアイへの最初の移民十一家族八十一人がアスンシオンから一三〇kmほどのラ・コルメナに移住しました。戦後は、日本政府直轄移住地の開設が本格的に進められました。その後、現地の受け入れや入植地の整備、移住者への農業指導を行う組織として日本海外移住振興株式会社と日本海外移住協会連合会（のちに合

併して現在のJICAの前身の一つとなる）によって直営の移住地も開かれ、一九五〇年代から六〇年代中頃に掛けて多くの日本人がパラグアイに移住し、その多くが農業に従事しました。日本人移住者が始めた大豆やトマト、メロンなどの栽培はパラグアイ人の農家にも広がり、現在パラグアイの主要な農作物になっています。アスンシオンやエンカルナシオンなどの都市ではスーパーマーケット、レストラン、旅行会社など商業界で活躍したり、弁護士、会計士、医師などの専門職に就いたりする日系人も多くいます。また、石油公団総裁や農牧省副大臣など政府の要職に就く日系人二世も出ています。先代、先々代の駐日パラグアイ大使も日系人でした。

しかし、これまで日本の学校教育において、日本人移住者について教科書をはじめ授業で取り上げられることはほとんどありませんでした。アスンシオン日本人学校の子ども達にとって、現代史において多くの日本人がパラグアイに移住した事実、彼らとその子孫の現地での苦労や貢献、継承された文化等について同じ日本人として共感を持って学ぶことは、現地理解の重要な内容でしょう。そこで同校では二〇一八年度、子



ども達が楽しんで日本人の移住の歴史や移住地での生活を学ぶ教材として、JICA横浜海外移住資料館が作成した「移民すごろく」に学んで、「パラグアイ移住すごろく」の開発を行いました。これは単なるゲームとしてではなく、三十枚のクイズシートとしての活用も考慮されています。日本を出発して、船に乗りパラグアイに渡り、移住地でのような体験をして現代に至っているかという歴史的経験をクイズにしてみました。解と説明事項が記載されています。

この移住すごろくは、日本語学校に通う日系人の子ども達にとっては、

自身のルーツに関わる祖父母や両親の移住の歴史や経験のほか、日本人(日系人)のパラグアイへの貢献について学ぶ契機にもなります。子どもが興味を持つよう、また日本語学習の教材としても役立つように易しい日本語を心がけ、クイズシートには写真やイラスト等多用するよう工夫されました。完成した移住すごろくはアスンシオン日本語学校のほか、各移住地にある日本語学校にも寄贈し活用されています。

### 三 社会科副読本『私たちのパラグアイ 第三版』の作成

日本においても、小学校第三・四年の社会科地域学習で用いる副読本づくりが各自自治体で行われていますが、海外の日本人学校の子ども達にとっても現地理解を進める教材として社会科副読本の果たす役割は大きいと思います。アスンシオン日本人学校でもこれまで副読本として『パラグアイ』(一九九〇年)、『アスンシオンに生きる』(一九九四年)、『わたしたちのパラグアイ』(二〇〇三年)、『わたしたちのパラグアイ(第二版)』(二〇一四年)を作成してきました。そこで二〇一九年度には、二〇二〇年度から実施される新しい学習指導要領の改訂にも合わせて

『わたしたちのパラグアイ』の改訂作業を行い、同年三月に第三版の完成を見ました。

この副読本は大きく二部にわかれていて、第一部は小学校三・四年生が社会科で学ぶ学習指導要領の内容に従って編集され、第二部は小学校四年生も含め、主に五年生から中学生を対象に子ども達が暮らすパラグアイについての理解を深めることを目的にした読み物になっています。これまでの副読本は白黒版でしたが、今回のものは全ページにカラー写真やイラストを豊富に使って魅力的に仕上げられました。

今回の改訂の趣旨について同校の加藤雅亮校長は改訂版の「はじめに」で次のように述べています。

「今回の改訂で意識したのは、この副読本をアスンシオン日本人学校の子どもたちだけが使うのではなく、パラグアイの国内にある日本語学校の子どもたちも使える教材にする、ということ。日本語学校の子どもたちが日本語でパラグアイについて学ぶ。このことは、パラグアイへの理解を深めるだけでなく、日本や日本語の理解を深めることにもなる、と私たちは考えました」

このように、この副読本は日本人学校の子どもの現地理解だけでなく、



日本語学校に通う日系パラグアイ人の子どもの日本・日本語理解のための教材としての役割も果たすことを願って作られたことが大きな特色です。

さらに、もう一つの特色は日本とパラグアイの関係を考える重要な歴史的事象「日本人移住」について大きく取り上げていることです。なぜ日本から多くの人達がパラグアイに渡ったのか、どうやってどんなところに行ったのか、そこでどんなコミュニティ(移住地)を作りどんな仕事に就き、どんな暮らしをしたのか、パラグアイ社会にどんな貢献をしたのか等について、移住一世への興味深いインタビュー記事も取り入れながら記述されています。

日本人の移住については前述したように日本人学校の子ども達にとっては現地理解の重要な学びの一つです。同時に日本語学校に通う日系人の子ども達にとっては自身の祖父母や両親の移住の経験、すなわち家族の苦難や克服の歴史、ホスト社会にあって維持・継承してきた伝統文

化等を通して自分達のルーツについて学ぶこととなります。そのことによって日系人としての自己のアイデンティティの確立を促し、ホスト社会であるパラグアイで自信を持って生きることにつながります。

**四 副読本の内容と作成の願い**

副読本の第一部、第二部の目次は下表の通りです。

第一部では、主に小学校第三・四年生の社会科の学習指導要領の内容に準拠して、子ども達にとつての身近な地域であるアスンシオン市に焦点を当て、地域の様子、地域に見られる生産や販売の仕事、地域の安全を守る働き、市の様子の移り変わり(第三学年)、人々の健康や生活環境を支える事業(第四学年)について取り上げられています。また第二部では、日本では第五学年以上で学ぶ日本についての内容をパラグアイに置き換えて、関連する学年の学習箇所でも学べるようになっていきます。

この副読本は、前述したように日本語学校の日本語の教材としての活用を想定し、全体を通して平易な日本語にし、三年生以上で学習する漢字には全てルビをつける等の工夫がしました。また日系人の子ども達を使うことによつて、普段、学校でス

ペイン語で学んでいるパラグアイの地理、歴史、産業、文化などを日本語で学び直せるバイリンガル教育の教材としての意義もあります。

紙面の構成にあたっては、単元の最初のページに単元を象徴する写真を掲載するとともに、その下に本時で追究する「学習課題」を問いの形で示し、この単元で何を学ぶかを明示しました。また、本文の両脇にスベースをとり、本文の内容を補う解説やコラム、本文中のスペイン語などの難しい用語の解説、簡単な年表、課題の調べ方のワークシート等載せて理解や技能の深化を図りました。

特にこの副読本で学んだ子ども達が、パラグアイに関してネガティブな認識を持たないよう、学習指導要領の目標にもある、「地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚」を持てるような記述を心がけました。

第二部では、パラグアイについての学習を通して、「世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚を養う」国際理解教育の教材にもなるよう意識しました。

**五 おわりに——今後の課題**

日本では社会科の副読本を作成する場合は、市町村の小中学校の社会

科部会に所属する社会科専門の多くの教員によつて時間をかけて作成されるのが一般的です。

今回アスンシオン日本人学校では、加藤校長先生を含む六名という少数の先生方が一年間という短い期間で、自身の足でフィールドワークし、協力して副読本を完成されたことに敬意を表するとともに

に、本書の作成に様々な協力をされた本プロジェクトのコーディネーターである平岩佐江子さんはじめ多くの皆さんに感謝申し上げます。

本書の完成と時を同じくして、パラグアイにも新型コロナウイルスの感染が広がり、アスンシオン日本人学校でもオンライン授業となり、子ども達が地域に出て学べない状況にあると聞いています。一日も早く完成された副読本を手に、子ども達が

地域のフィールドワークに出かけることができるように願っています。

また、この副読本作成の目的の一つでもある日本語学校での活用についても考えていく必要があります。そのためには本書の活用についての日本語学校の教員への研修が今後の課題となります。

第1部 私たちのくらすアスンシオン	第2部 パラグアイ共和国について学ぼう
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. わたしたちのまち みんなのまち                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① 学校のまわり</li> <li>② アスンシオンの市の様子</li> </ol> </li> <li>2. はたらく人と私たちのくらし                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① スーパーマーケットではたらく人</li> <li>② 農家の仕事</li> </ol> </li> <li>3. くらしを守る                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① 火事からくらしを守る</li> <li>② 事故や事件からくらしを守る</li> </ol> </li> <li>4. 住みよいくらしをつくる                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① 水はどこから</li> <li>② ごみのしよりと利用</li> </ol> </li> <li>5. のこしたいもの つたえたいもの                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① パラグアイ日本人移住地の歴史</li> <li>② アスンシオン日本人学校につたわるねがい</li> </ol> </li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 国土と自然 (小項目略)</li> <li>2. パラグアイの歴史 (小項目略)</li> <li>3. パラグアイの人々のくらし (小項目略)</li> <li>4. 産業と経済 (小項目略)</li> <li>5. 政治</li> <li>6. パラグアイの国際関係</li> <li>7. 日本とのつながり                             <ol style="list-style-type: none"> <li>① パラグアイへの移住の歴史</li> <li>② 移住地探訪</li> <li>③ 一世の皆さんをたずねて</li> <li>④ 活躍する日系人の皆さん</li> <li>⑤ 日本とパラグアイの経済・文化交流</li> <li>⑥ パラグアイにある日本の機関</li> </ol> </li> </ol> <p>参考資料</p>

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## 「AG5 補習授業校情報交換会」その後

AG5 運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談員 佐々信行



7月号の本欄でご報告したように、新型コロナウイルス感染予防対策をきっかけに「AG5 補習授業校情報交換会」が始まりました。参加した方からのリクエストで回を重ね、今も続いています。集まって話すといろいろなことが見えてきます。すべての補習授業校の教室に子どもたちが戻れる日を待ち望みながら、学び合いが続いています。

今月号では、前回ご紹介した後の様子についてお伝えします。

### これまでの情報交換会のテーマ

四月にスタートさせてから、九月末日の時点で十五回もの「AG5 補習授業校情報交換会」を行ってきました。各回のテーマは次の通りです（日付は日本時間）。

- ・ 第一回 補習授業校のウイルス対応策（四月五日）
- ・ 第二回 ヨーロッパ地区の情報交換（四月十三日）
- ・ 第三回 オンライン授業以外の選択肢（四月二十二日）
- ・ 第四回 今伝えたいこと、聞いたこと（五月五日）
- ・ 第五回 遠隔授業と「評価」（五月十三日）
- ・ 第六回 元気の出る話（五月二十四日）
- ・ 第七回 やっぱり大変、一年生と幼稚園（六月十日）
- ・ 第八回 補習授業校の複式授業（六月二十一日）
- ・ 第九回 日本語で本を読ませる（七月五日）
- ・ 第十回 低学年の算数（七月二十日）
- ・ 第十一回 もっと聞きたい。幼稚園、どうしてますか（八月三日）
- ・ 第十二回 中学生の日本語／国語指導（八月十三日）

### 仲間がいると

- ・ 第十三回 コロナ対策の今（八月二十六日）
- ・ 第十四回 オンライン授業下の学校行事（九月六日）
- ・ 第十五回 ここが楽しい、中学生の指導（九月二十二日）

新型コロナウイルスの問題が出てくる前から、多くの補習授業校の先生方から、「同じ立場の先生たちと話したい」という希望をうかがっていました。図らずも、この危機がたくなり、皆さんの先生たちが集まるきっかけになりました。同じ願いをもって働く仲間なので、お互いの気持ちがよく分かり、真剣な中にも楽しい時間を過ごせる場になっています。

テーマによりますが、今では毎回五、六十人から百人ぐらいの方に参加していただけるようになりました。一時間の間に発言できる人数は限られるので、「聞くだけ参加」になってしまう方も少なくないのですが、それでも「同じように苦労しながらがんばっている人たちの話を聞いて元気が出た」という声をたくさんいただいています。

ます。ときには、情報交換会の後に「雑談タイム」を設けて自由な交流をすることもあります。

ここでのつながりを機に連絡を取り合い、教材やアイデアを交換し合うようになった先生たちもいます。複数の補習授業校に加え、日本国内の学校も巻き込んでSDGsの学習に取り組み、その成果をオンラインで発表するという元気なプロジェクトも立ち上がりました。

ウイルス感染が広まって登校ができなくなった初めのころは、「当面休校するしかない」と考える補習授業校も少なくありませんでした。しかし情報交換をしてみると、登校できなくても子どもたちの学習の場を作る手段がいろいろあることに気づかされました。

先に取り組んだ補習授業校の試行錯誤の結果から、後発の学校はいろいろな手掛かりを得ることができました。「コンピュータは苦手」という先生たちも、子どもたちのためにやってみようと考えようになりました。夏ごろには、情報交換会に参加する先生たちが所属するほとんどの補習授業校で、何らかの形で登校できない子どもたちに学習させる環境を提供するようになりました。この面では、日本国内の学校より補習

授業校の方が先を行っているといえるかもしれません。

**探す人は多いほどよい**

インターネットの世界には無限と

- ・ いったいいほどの情報があふれています。あまりにも量が多いので、その中からほんとうに役に立つ情報を探し出すことは容易ではありません。
- ・ 海外に住んでいても日本の本を子どもたちに読ませる方法は？
- ・ 日本式の筆算を分かりやすく見せてくれる教材は？
- ・ 小さい子が楽しく日本語に触れるチャンスは？

・ 中学生に日本の古典を親しませるには？

親や先生は、必要に迫られて子どものためにいろいろなものを探します。いいものに行き当たるにはそれなりの時間と運が必要ですが、情報交換会では、先生や親が見つけた効果的なウェブサイトを紹介されています。直接子どもに見せるものだけでなく、先生たちが授業の準備に役立てたり、IT技術を学んだりできるサイトもあります。同じ立場の人が見つめてくれたものはやはり分かりやすくして便利です。

私自身も情報交換会で教わったサイトの世話になることが少なくあ

りません。過去の情報交換会資料を見ていただくと、そのようなサイトがたくさん載っています。

**先生の仕事とは**

遠隔授業の方法として、テレビ会議システムを使ったライブの授業に次いで採用されているのは、授業を録画して視聴させる方法です。これにはいくつかのメリットがあります。

第一のメリットは兄弟姉妹がいても時間の重なりを気にすることなく困らないことです。同時にオンライン授業に参加するには子ども数だけコンピュータなどのデバイスが必要になりますが、録画なら家庭で時間を調整して見せることができます。日本に一時帰国している生徒が授業を受けたという場合にも録画なら時差の心配をしなくて済みます。

テレビ会議に慣れていない先生は、ライブの授業には、やはり緊張します。「話すことが分からなくなってしまう」しどろもどろになったらどうしよう、「オンラインなので保護者も一緒に見ることで、毎時間授業参加のプレッシャーを感じてしまう」などと心配になるのは無理もありません。録画の授業だと、生徒に見せるものをあらかじめ自分もチェックできるし、失敗したらやり直しもで

きるので少しは安心感があります。また、ネットの接続が途切れてしまふようなことがあっても困りません。授業を録画するときは、先生はカメラの前で、目の前に子どもたちがいることを想像しながら授業を進めます。子どもたちに向かって「ここを声に出して読んでみましょう」、「先生と一緒に歌いましょう」などと行動を呼びかけることもあります。視聴する子どもを見ていた保護者によると、小さい子どもたちは結構指示に従って声を出したり、動いたりしているようです。先生が話すときと子どもたちが聞かるときには時間のずれがありますが、ある程度のコミュニケーションは成り立つようです。さて先生たちの実感では、授業の録画を製作するのは、実際に教室で授業するより何倍も大変です。「やり直しができる」という利点も、別の角度から見ればそれだけ負担を強いられることになりました。それだけ苦勞して録画した授業を一度で使い捨てにするのはもったいない話です。A組の先生が作ったものをB組でも利用するというのは賢い方法でしょう。二人の先生が交代で録画をすれば、授業の準備は半分で済みます。

また、同じ学年で学ぶ内容は毎年ほぼ同じですから、今年録画した授

業を来年も利用することはできないでしょうか。同じ先生が同学年を担当すれば子どもたちは昨年録画した授業とは気づかないかもしれません。とても分かりやすい授業の録画ができたなら、子どもたちが登校するようになっても使えるかもしれません。

録画で十分伝えられるものもあるし、ライブのコミュニケーションが効果を発揮する場面もあります。実際、録画とライブを組み合わせた授業を行っている補習授業校もあります。このように考えてみると、「授業とは何か」、「先生は何のためにいるのか」という疑問に突き当たります。

登校できない中での授業の形を考えていくうちに、教室でなくてもできること、生徒と先生が直接触れ合わなければならないことが見えてきました。先生でなくてもできることはITなどに任せて、先生は先生でなければできないことにエネルギーを注げばもっとよい教育実践ができるのではないのでしょうか。

今の状況は望んだものではありませんが、図らずも先生たちの仕事を見直すチャンスになっているのです。

**「評価」と「成績」**

遠隔授業の「評価」「成績」をどう考えるかということは、情報交換会

で何度も話題になりました。各補習授業校ではそれぞれに悩んだ末、それぞれの対応をとっています。

八月末のアンケートでは、「登校して行った授業と合わせて評価に加味する」が約二〇%、「遠隔授業の部分は評価に加味しない」が四〇%、「その他」が一五%、「まだ分からない」が二五%でした(個人の回答)。

遠隔授業でのテストで「カンニング」をどう防ぐかということになる」と決定打はありません。「生徒と先生の信頼関係で」という先生もいましたが、ある補習授業校からは、「わが校のある国では、カンニングは文化のようなものになっているので、その日本的な感覚はまったく現実的でない」という反応がありました。テストが成績の大きな要素になっていて、カンニングを防がないのであれば「遠隔授業の部分は評価に加味しない」のが最善ということになるかもしれません。ここでも、「テストとは何か、評価、成績とは何か」という本質的な問題を考えさせられます。

確かに、単に何かを知っているかどうかの記憶を問うようなテストなら、カンニングペーパーは大きな役割を果たします。しかし、初めから資料を見ながら考えを表現するよ

うなシチュエーションであれば、役に立つ資料を用意することも生徒の能力の表れと見ることが出来ます。

また成績を学習の成果と見るとき、テストで測れる部分はどれだけあるかということも考え直す必要があるでしょう。対面で授業を行う場合でもテスト以外の評価の指標がいろいろと存在します。「テストに頼らない指標」を考えれば、遠隔授業でも公平な評価が可能かもしれません。

ある先生は、「評価の目的は生徒のモチベーションを高めること」と考え、自分で自らの学習の成果を評価させる方法をとりました。「この学習をすることによって自分がどれだけ高められたか」ということを目に見える形で自覚させようとしたのです。この考え方には賛同の声が多く上がりました。確かに、他人と比較しない状況で自分の学習を振り返るなら、カンニングはまったく意味を持ちません。この補習授業校では他人との比較になるような「通知表」は発行しないことにしたそうです。

「評価」「成績」は、学校の中で重要なことに違いないのですが、ともすれば、「今までのやり方」にあまり疑問を持つことなくやりつづけていたという面があるかもしれません。コロナ禍でそれができなくなっ

いろいろな角度からこの問題を考えさせられることになりました。先生たちが本質を考えることは必ず子どもたちの学習環境をよくすることにつながるでしょう。

### 子どもが持っていた

授業の中で、グループで話し合

せたい場面があります。教室なら、グループの様子を見ながら机間巡視をして、しっかりと話し合いに取り組めていないグループには注意をしたり、話が行きづまっているところにヒントを与えたりすることが出来ます。あるテレビ会議システムには参加者をグループに分けて話し合わせる機能があるのですが、グループがそれぞれ独立した「部屋」に割り当てられるため、先生はそのうちの一つにしか加わることができません。すると、ほかのグループの様子がまったく見えなくなってしまうのです。ところが同じシステムを使いながら、グループ活動を積極的に進めている先生がいました。詳しく聞いてみたところ、「オンラインの会議ではすべての生徒をメインルームにおいて、グループの話し合いは「二面」のグループ通話でやらせる」ということでした。オンライン授業が始まる前から、子どもたちはグループ通

話で日常的に話し合っていたのです。生まれたときからコンピューターやスマートフォンのある社会で生きてきた子どもたちは、先生たちが知らないいろいろな手段を知っています。困ったとき、子どもたちに相談してみると、彼らはすでに解決策を持っているかもしれません。

しかし、「大人が知らないことを当たり前のように知っている」ということは、逆に「大人が普通に知っていることを知らない」という可能性もあります。「今の子どもに教えないといけないものは何か」ということもあらためて考えさせられます。

\*1 SDGs(Sustainable Development Goals) : 二〇三〇年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。二〇一五年九月の国連サミットで採択された。

\*2 情報交換会資料 : <https://ag-5.jp/post/detail/13>

※情報交換会のスケジュール等は「補習校教員交流Facebook」をご覧ください。  
<https://www.facebook.com/groups/1664126560300837>



# エー A G 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## 香港日本人学校グローバルクラスの5年目の取組 —グローバルクラス(GC)全体の取組とグローバルスタディーズ(GS)の取組の実際—

香港日本人学校香港校小学部5年グローバルクラス担任 白濱ななみ

香港日本人学校香港校小学部では、今日のように変化の激しいグローバル社会を主体的に生き抜いていく児童を育成するために、2016年にグローバルクラス(GC)を開設しました。そして「日本人学校におけるグローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発」を進めているAG5の提携校として、カリキュラムの開発や改善に努めながら今年度で5年目となりました。今年度のGC全体の取組とグローバルスタディーズ(GS)の取組について紹介します。



### グローバルクラス(GC)とは

本クラスでは、児童に育ませたい資質として、

- ・グローバル社会で通用する英語コミュニケーション能力
- ・二十一世紀に必要なグローバルスキル(分析力やプレゼンテーション力、調査力、課題解決力など)
- ・グローバル市民としての主体性を掲げています。そのために、英語イマージョン教育・本校独自の教科であるグローバルスタディーズ(GS)・Students Action Project(SAP)という、学んだことを外に発信する活動を柱とした教育活動を行っています。

### 一 今年度のGC全体の取組

#### (1) ICT環境の充実

校内全館にモニターが整備されたのに伴い、GCに一人一台のクロームブックが導入され、GSのSAPでも子どもたちが自由な場所で動画を撮って編集し、メッセージ動画を制作するなど、学習の幅が大きく広がりました。今後さらに主体的な活動を実現させるツールとして大いに活用していきたいと考えています。

#### (2) 英語力向上に向けた新たな取組

試験を経て編入学してくるとはい

え、GCの子どもたちの英語力には差があり、全体の英語力を向上させながら、いかにしてこの差を縮めていくかが課題となっています。

#### ① オンライン教材の積極的な活用

子どもそれぞれの英語力に合った教材で学習を進めていくことのできるiReadyの継続的な活用に加え、今年度はBrainPopも導入しました。

BrainPopには各教科、様々な分野についての動画やワークシート、語彙シートなどが入っています。動画を見て、クイズ形式で確認をするなど教材を組み合わせた活用が可能です。

#### ② 英語の習熟度別レッスングループ

一クラスの英語の授業を三人の教員で担当していることを生かして、授業内では児童の英語力に合わせたグループレッスン(ワーク)を多く取り入れています。また午前中しか授業のない期間には、週に二回、午後には少人数グループ別英語レッスンをしています。一斉授業ではなかなか発言できない子どもでも、自分のレベルに合った活動ができることで、積極的に英語を使う姿勢が見られます。そのくり返しによってスピーキング力の向上が期待できると考えます。

#### ③ GCライブラーの設置

今年度から新設されたGCライブラーには、フィクションやノンフ

ィクション、図鑑やGSに関連したものなど幅広いジャンルの本が揃っており、子どもたちに人気のある漫画の英語版も置いてあります。今後子どもたちからの要望を聞き、楽しみながら英語の文章に触れられる環境を整えていきたいと考えています。

#### (3) Withコロナを見据えた挑戦

コロナ対策により今までの取組に様々な制限が課せられることになりましたが、ピンチをチャンスに変えるべく実践したことを紹介します。

#### ① GCオンラインアセンブリー

学年関係なくみんなで楽しむことを合言葉にGCアセンブリーをオンラインで実施しました。総勢五十六人。ズームのブレイクアウト機能を使って縦割りでグループ編成することで、学年の枠を越えた活動をオンラインでも行うことができました。

野菜や日用品等から教師が出したお題の物をすばやく持つてくるという家にいるからこそできるゲームで子どもたちは大いに楽しんでいました。

#### ② ハイブリッド型編入学試験の導入

今年度九月の編入学試験の際、コロナ対策の検疫措置のため、受験を断念するという例が出てしまいました。今後の状況を鑑みて、香港以外からの受験機会を確保するために編入試験の方法を次のように変更しま

した。

・環境整備の条件をクリアできる香港以外からの受験者は、オンラインで試験を受けることができる。

・集団面接を実施しない。

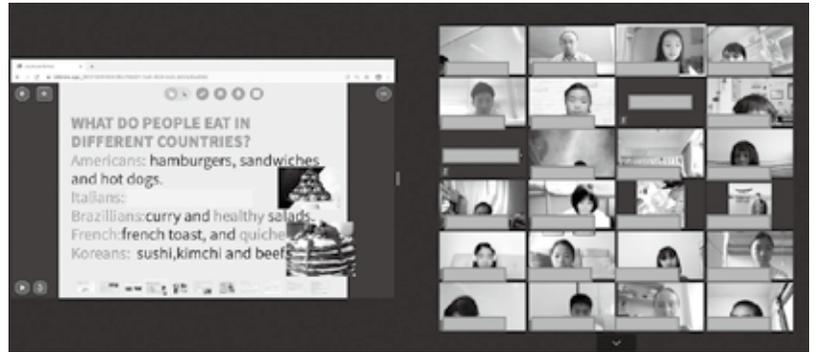
公平性を保つために試験内容や方法を再検討したり、複数のデバイスを用意してもらうなどの条件を設定したりしています。今後主流になるであろうCBTの実施に挑戦するのは意義がありますし、何よりGCに興味を持たれた方に一人でも多く受験してもらいたいと思います。

### ③ プレゼンテーション集会

子どもたちが一学期のGSの学習からさらに探究したいトピックを自由に選び、リサーチしてまとめたブレゼンの場として、昨年度からミニエキシビジョンを始めました。今年度はオンラインで行うことになり、ロイノートやグーグルスライドを使ったプレゼン形式での実施となりました。日本にいる祖父母等、多くの方々に参観していただき、オンラインだったからこそその良さがありませんでした。子どもたちは多くのフィードバックから、自信を持ったたり、新たな課題を見つけたりしたようです。

### ④ オンラインガイダンス

編入学試験に向けたガイダンスをオンラインで実施しました。オンラ



プレゼンテーション集会

インで行ったことにより、日本やアメリカからも申し込みがありました。ブログやホームページに加え、フェイスブックも開設して広報にも力を入れていたこともあり、多くの方々が参加しやすいものになったのではないかと感じています。また運営上でも大がかりな会場準備の手間を省くことができ、ガイダンスは今後もオンラインで実施していく予定です。

## 二 今年度のグローバルスタディーズ(GS)の取組の実際

### (一) 昨年度の成果と課題

教師の入れ替わりが頻繁な日本人学校のGCにとって、誰が担当してもGSの質を維持・向上できるかが大きな課題です。対処策として「GSがどのようなものか」「何を大切にしているのか」「どう展開していくか」などを記載した「GSカリキュラムマップ」を作成しました。AG5先進校視察で同志社国際学院初等部に伺った際に得たアイデアです。

また、GSにおける英語の扱いについても議論を重ねました。バイリンガル教科と銘打っているGSなので、教師もなるべく英語を使用しようとする努力をしました。その結果、英語のレベルに関わらず、以前より英語を使うとする児童の姿がありました。一方で、英語を使用することを大切にあまり、深い思考を促せなかったり、教師も良いタイミングでうまく発問ができなかったりなどの課題も浮かんできました。

そこで今年度は日本語をメインにおきながら、英語担任とタッグを組んでブレゼンやディスカッションなど英語を利用する機会を適宜設けることにしました。

### (二) 今年度の実践と工夫

わたしは今年度からGSを担当し始め、最初の単元「環境と持続可能な社会」を実践しました。

① ユニットのねらいと目指す価値変容  
ユニットのねらいは次の三つです。  
・環境には様々な形があることを理解する。  
・適切な環境が十分に保持されない場合、どんな影響があるか考える。

・それぞれの目的や生態系に合う環境を守るために、自分たちにできることは何かを見出す。  
「環境」を多角的視点で捉え直し、環境問題を少しでも自分事として捉え、環境に優しい行動と考え方ができることを目指しました。

② 実践とその工夫  
次の図は、実際のユニットの流れを表した Inquiry Cycleです。昨年度作成したカリキュラムマップを参考にしながらも、K\*WLチャートから見えてきた実態に合わせて題材を変えたり、子どもたちの疑問を課題として設定したりして、今年度に合った流れを心掛けました。例えば、最初のリサーチは「自分の生活はどのくらい自然や生き物に支えられているのか」という、ある児童の疑問をテーマとして設定しました。

このユニットでは英語で二回プレ

\*知っていること、知りたいこと、学んだことを書き留めるチャート

ゼンを行い、英語教師にも参加してもらいました。そうすることで、英語を少しでも使おうという意欲の喚起をねらいました。またプレゼン資料の英語表現も添削してもらい、このユニットの英語表現を習得する機会として、日本人教師ではできないところをカバーしてもらいました。また、レポート作成やプレゼンにおいてクロームブックを積極的に使いました。新しいツールの使い方を学ぶことで、表現方法を増やし、自分の考えを伝えるために適したより良い方法を選択できるようになります。グーグルドキュメントやグーグルス



ライドを初めて使う子が大半でしたが、使いながら慣れていくという感じで作業が進んでいき、子どもたちのICT機器への順応性の高さには感心しました。いつでも自分専用の機器が使えるGCの強みを今後も生かしていきたいと思っています。

③ 成果と今後の課題

昨年度作成したカリキュラムマップは初めて指導する際のGSの道しるべとして活用することができました。これに今回の実践をもとにした加除修正を加えることが、GSの質の維持・向上につながると考えます。またディベートを通して、一つの問題を多様な視点から考えることができるようになったのも成果の一つです。今回は、ディベートの流れをつかむことや、いろいろな立場から考えるものの見方を大切にできなかったため、英語の使用については特に触れませんでした。しかし、ディベートで使う英語も指導事項に挙げられているので、英語教師に指導してもらい、英語でチャレンジする機会も必要です。残り二つのトピックの中で、英語を交えたディベートも取り入れようと思っています。

(3) GSで見えてきた課題と改善策、今年度の方向性

GSを実践してみても一番難しかった

たのが評価です。例えばプレゼン力について、二回行ったプレゼンを比較することでその子の変容を見てとることができました。しかし五年生の段階でどんな姿に達していればいいのか曖昧で、一回目からは良かったけれど今のプレゼン力が四段階で表した時にどこにあたるのかについては迷ってしまいます。

また担任一人一人が自分の主観で評価するので、四年生担任が設定した基準が、六年生担任の設定した基準より高いという逆転現象が起きる可能性もあります。

今年度の残りの期間で、それぞれの学年でどこまで身に付けさせていくか系統立てて整理し、各学年のルーブリックを作成することで、子どもたち自身の自己評価にもつなげられるのではないかと考えます。昨年度作ったカリキュラムマップと各学年の明確なゴールを引き継いでいけば、初めてGSを担当する教師にとってさらに授業がイメージしやすくなるのではないかと思います。

## 最後に

今年度はコロナの影響でオンライン中心の教育活動が続いています。GCでも不安定な状況に屈することなく担当者全員でタッグを組んで、

目指す児童像を達成するために前進してきました。しかし、来年度の教師の入れ替わりで、GC設立当初の実情を良く知る教師が一人もいなくなってしまうかもしれません。そんな中でも、AG5のサポートをいただきながら目の前の課題に対して試行錯誤をくり返し、GCにおける教育活動のさらなる充実に向けて前進続けていきたいと思います。



ディベートに向けた話し合い



一人一台のクロームブック導入

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## 補習授業校の先生方を対象としたオンライン初任者研修(1)

AG5運営指導委員・東京都立大学教授 岡村郁子

AG5プロジェクトでは、2020年6月から2021年3月にかけて、オンライン会議システムを使った計5回の初任者研修を開催しています。AG5初の試みとなるこの研修に、世界中から各回60名にのぼる先生方がご参加くださり、現在、3回までが終了いたしました。対象は原則として経験3年未満の先生方ですが、それぞれの学校で初任者研修にあられる管理職の方々をはじめ、ベテランの皆様にもご参加いただき、好評を博しています。

今月号では、現在までに終了している第1回～3回について、その内容と成果を抜粋してご報告いたします。

### 【研修の目的】

- (1) 補習授業校の概要やその教育の特質を知る
- (2) 授業を計画、実施、評価、改善する基本を習得する
- (3) 様々な子どもたちがともに学ぶための指導・支援の基本を習得する

### 【研修内容と日程】

- 第一回 二〇二〇年六月二日(火)  
「補習授業校とは」佐々木信行・岡村郁子 (AG5運営指導委員)
- 第二回 二〇二〇年七月八日(水)  
「授業づくり」学習計画の立て方、教材研究、評価「佐々木常広(ダラス補習授業校副校長)、渋谷真樹 (AG5運営指導委員)
- 第三回 二〇二〇年九月三日(木)  
「授業実践」教え方の工夫「佐藤恵美(ダラス補習授業校 AG5コーディネーター)、雨宮真一 (AG5研究員)
- 第四回 二〇二〇年十二月七日(月)  
「すべての子どもたちの日本語力向上を目指して」近田由紀子 (AG5運営指導委員、今澤悌 (AG5研究員)
- 第五回 二〇二一年三月二日(火)  
「フリーディスカッション」全員

### 第一回「補習授業校とは」

初回では、AG5補習授業校チー

ムのリーダーである佐々木委員が本研修の目的と概要について説明するとともに、岡村が補習授業校の子どもたちの持つ特徴についてお話ししました。二〇一八年七月号でお伝えしたとおり、北米の補習授業校を対象とした調査では、現在、半数以上が永住予定または日本へ帰国するかどうかわからないと答えており、英語が第一言語となっている子どもが四割を超えています。在籍児童生徒も多様化の一途をたどり、補習授業校に対するニーズも多岐にわたります。こうした多様性を排除せずに包摂し、二言語・二文化を積極的に活用すること、「グローバル人材育成」という従来の考え方から一歩踏み出して、「トランスナショナルな生き方の支援」を行うこと、「足りないものを補う」だけの場ではなく「グローバル社会のフロンティア」としての役割を担うことが、これからの補習授業校の在り方といえるでしょう。なお本調査結果の詳細は、こちらのURLよりアクセスして、AG5ホームページからご覧いただけます。



### 第二回「授業づくり」学習計画の立て方、教材研究、評価」

ダラス補習授業校の佐々木副校長

先生からは、今般の学習指導要領の改訂の方向性をふまえて、「アクティブラーニング」と「カリキュラムマネジメント」の二つのキーワードにそってお話しいただきました。

また、年間指導計画の立て方や板書例、ワークシート等の各種資料にアクセスできるインターネットサイトについても紹介がありました。

### ① 文部科学省「CLARINET」

「施策の概要」／「(3) 在外教育施設の教育水準の向上」／「③ 教員の研修」の中に「ウ. 補習授業校教師のためのワンポイントアドバイス集」があります。ここには年間指導計画作成にあたっての具体例や学年別の指導資料集のリンクもあり、単元ごとの学習の流れや、各種ワークシートもダウンロードすることができます。

② 補習授業校派遣教師校長協議会による「補習授業校用の国語と算数の年間計画」

中部テネシー日本語補習校の後藤誠司校長先生より、AG5のホームページ上の「発表ブース」に二〇二〇年度から使える年間計画案をご提供いただいています。低学年の国語については年間八十時間分のもので二〇時間分のものが用意されており、各学校の実態に合わせて利用す

ることができません。

③「楽しく日本語を伸ばす補習授業校学習活動計画集」

AG5補習授業校チームがダラス補習授業校と協力して実施した授業の学習活動計画を冊子にまとめ、二〇二〇年四月に発刊したものです。

単元別に「目標」と「学習課題と活動」が示されており、ダラス補習授業校における実際の活動を見ていただくことができます。この資料もAG5のホームページからダウンロードが可能ですので、ぜひ参考にさせていただきます。



以上のような手軽にアクセスできる教材は、準備にあまり時間の取れない補習授業校の先生方には心強いものになるでしょう。

続いて渋谷委員からは、教師に求められる力量や、授業の計画・実施・評価・改善というサイクルを理解して学習計画の概略をつくることのできるようになることを目標として、次のような講義がありました。

初任者の先生方には、保護者の立場から急に先生になったり、平日はお仕事をしたり、大学院の学生をやったりしながら週末だけ補習授業校へ来ることになったという方も多いでしょう。まずは「自分ができるこ

と」と「教えること」は違う、という

ことを念頭におくことが大切になります。よい教師は、「わからないこと」がわかる人であり、教師には以下の三つの力が必要となります。

①「教える内容を理解する力」  
②「子どもを理解する力」  
③「教える技術」

「子どもを理解する力」は子どもの発達段階と、現地校や家庭で何をどう学んでいるのかを理解すること。

「教える技術」は子どもが目を輝かせる授業のための技の習得。ただ教科書の内容を追うのが授業ではありません。教科書を使って子どもにどんな力をつけさせたいのかわかるように準備してください。

### 第三回 「授業実践」の工夫

AG5の両宮委員より「教える技術」について、姿勢、計画、技術について、次のお話がありました。

①「姿勢」  
子どもの成長支援はめ方の心構え

スタートとゴールの両方から、子どもを支援することが必要です。スタートでは「こんなことができるようになったね」「すごいね」という言葉がけで送り出し、ゴールでは「よくできました」「頑張ったね」という

言葉で迎えてあげたいものです。

②「計画」  
子どもの成長イメージ

どんな子どもを育てたいかイメージしましょう。卒業時・学年末進級時・単元終了時にそれぞれどのようなことができるようになってほしいかを具体的に考えれば、そこに向けて各時の「授業の目当て」を明確にできます。

③「技術」  
子どもの学習環境

子どもの「体の動き」をコントロールするために、以下のような教室でのルールを工夫してつくり、了解事項にしておきましょう。

・指示は一度に一つ・先生と子どもは同時には話さない・活動を終えたら「座る」、「本を閉じる」、「先生を見る」・同意見の場合はチョキで挙手。

子どもたちの「頭の動き」を上手にコントロールするために、以下のようなことも心がけてみましょう。

・子どもの頭の中身をイメージする・活動中に別の指示を出さない、なるべく話しかけない・身近な質問から高度な質問へ・重要なポイントには繰り返し尋ねて確認する。

体を動かさずに済む授業、何も

考えないで済むような授業はしないように工夫をしてください。

### 「授業の展開リズム」

一つの活動は集中を持続させるために十・十五分間と設定し、できるだけであれば時間を徐々に伸ばします。聞く・話す・読む・書くなどの各時間の配分にも注意します。また、どの子どももどこかで活躍できるように配慮することも重要です。毎回の授業で五・十分程度の短時間、継続的に行う「帯活動」を設定することも考えてみましょう。短時間でも、

長期間繰り返して定着させることが大切です。授業にメリハリが付き、家庭学習の動機づけにもなります。

続いてダラス補習授業校の佐藤先生はホワイトボードの前に立ち、実際の授業中継さながらのパフォーマンスを交えて、小六国語の各単元を例として話してくださいました。

①授業への導入  
「字びの雲田気」をつくる

佐藤先生から参加者へZOOM越しに「視線のビーム」が送られ、参加者の集中をばつと集めて授業が始まりました。手に持っていた紙を開くと「広げる」の文字。ホワイトボードに貼って、皆で声をそろえて読みます。次に取り出した傘をばつと広げて、手元のノートに「(かさ)

を広げる」と書かせます。このあと、全員が(一)に思い思いの文字を入れて文をつくり、できた人から起立順に発表して着席します。この数分の導入部分だけでも、子どもたちが集中を高め、見る・聞く・書く・話す、そして立つ・座る、さまざまな活動ができていたことがわかります。

板書された単元名と「めあて」を各自がノートに書き、全員で読み上げることで、本時のゴールに向けて何を勉強するのかを子どもたちに自覚させます。次に、「読書の世界を広げる」とはどういうことか、二分間各自で考えてノートに書きます。ここで導入からの「広げる」のイメージが役立ちます。こうしてさまざまな活動を交えての短い導入を行うことで、クラスに学びの雰囲気ができ、授業がぐっと進めやすくなります。

②板書の工夫・事前に用意した紙やマグネットの活用  
佐藤先生は、子ども一人一人の名前を書いたマグネットをつくってホワイトボードに貼っておき、さまざまな場面で活用しています。紀行文『森へ』の単元では、本文中の八つの写真のうち好きなもの一つを選び、各自のマグネットを番号のところ貼りつけました(写真1)。これで子どもたちが自分の意見を表明し、視



写真1

覚でとらえることができます。事前に用意した絵や紙も活用し、情報を見やすく整理して視覚化することで、子どもたちの理解を助けています。

③授業内での音読の工夫  
「たけのこ音読」は、子どもたちが好きな行を選んで、順番が来た時にぱっと立ってそこを読む方法です。「なりきり音読」は、おじいさんや宇宙人などのキャラクターになりきって読むやり方で、雰囲気がよくんだりした時に使ったり、子どもたちが活性化し、音読が苦手な子どもにも好評とのこと。「つながり音読」では、みんなの顔が見えるように輪になって座り、各自が好きな行を選んで一行ずつ読み進めます。誰もいなかった行は全員が読むと決めてお

くと「困ったときにはみんなが助け合う」という気持ちも生まれる」という思わぬ効果もあるとのことでした。

を理解し、筆者の主張に近づくことができず。初めの「主張」と終わりの「主張」の中間部に「事例」があることを、折り紙を観音開きにして理解させたり、段落ごとの接続詞によって文章の関係性を図に表したり、視覚的に情報を整理することで、子どもたちの理解を助けています。

④読解教材・それぞれの教材文の特徴を生かして読む  
物語文では、登場人物の心情バロメーターを数字で表現、セリフから人物像に迫る  
物語文では、登場人物の行動から見える心情の変化を「友情メーター」や「愛情メーター」に数字で表してみます。「帰り道」の単元では、主人公のセリフから人物像に迫ったり、探偵になって物語中の「事件」を追ったり等、工夫して物語を楽しんで読み進める様子が紹介されました。

週一回の補習授業校でも、工夫と事前準備と子どもたちとの向き合い方でここまでの授業ができることを示していただき、参加者にとっても良い目標となったことと思います。次回の「すべての子どもの日本語力向上を目指して」の様子についても五月号にてご報告いたします。どうぞお楽しみになさってください。

●古典のような難しい教材文でも、初発の感想を大切に  
六年生の教科書になると『天地の文』のような難しい教材も出てきます。まずは音読し、「すごい! 感動!」「……ため息」「おもしろい!」「なるほど!」の四つの初発の感想を板書してみます(写真2)。率直な感想を出し合うことで、面白さに気づき書かれている重要な内容にも十分にアプローチすることができそうです。

難しかりがちな説明文でも、誰にでもできる「キーワード」を数える」作業から何を中心に述べているのか

◎説明文は「謎解き」探検隊  
難しかりがちな説明文でも、誰にでもできる「キーワード」を数える」作業から何を中心に述べているのか

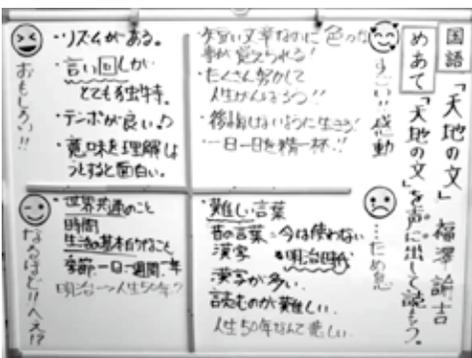


写真2

エー  
**A** ジー  
**G** ファイブ  
**5** **だよ!**

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



**多文化共生の学校づくり～青島日本人学校の実践～**

青島日本人学校教員 **岡本直恵**

青島日本人学校は、昨年度よりAG5のテーマ②「日本語力向上プログラム『バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発』」に取り組んでいます。昨年度は、在籍級担任と日本語指導担当が連携して行う日本語指導、バイカルチュラル人材育成の視点からの教科指導に取り組みました。そして今年度は多文化共生の学校づくりを目指した授業実践に取り組んでいます。

**はじめに**

本校は、在籍者の約半数以上がさまざまな国のルーツを持つ家庭の子どもであることから、もともと多様性に富んだ環境にあります。しかし傾向として、上の学年になるほど無意識に日本の価値観、ルール、文化の基準に従うような場面が見られるため、子どもたちが自分の背景を包み隠さず出せるような関係づくりが大切だと感じています。

そこで、それぞれの背景にある文化や習慣にも目を向け、尊重し合える関係を構築し、学校生活における共通の課題に対して「日本語」を媒介として対等に話し合っていくためにも、「日本語力の向上」と「多文化共生の学校づくり」の両軸を意識して日々の指導にあたっています。

**昨年度の取組(二〇一九年度)**

**(一) 課外の日本語教室**

小学部一年生を対象に、毎週金曜日の課外に四十五分間の日本語教室を開設しました。開設するにあたって入学前に日本語指導が必要な児童の保護者と相談し、入学直後から日本語教室での学習を開始しました。  
一学期は一日も早く周囲とコミュニケーションがとれるようにするた

めの「生活に必要な日本語」を、二期からは台北日本人学校の取組を参考にして「国語や算数などの教科の先行・補充学習」を中心に行いました。二月から新型コロナウイルスの影響で休校となったため、日本語を発する時間を確保したいという願いから、二・三月はオンラインによる日本語教室を実施し、一年間の復習を行いました。

**(二) 中学部・個別の日本語指導(取り出し)**

中学部の二名の生徒に対し、在籍級が学活や部活動の時間に、週一回の個別の日本語取り出し指導を行いました。二人とも小学部高学年の時に現地校から転入してきた生徒です。生活言語能力はさほど問題ありませんが、学習言語能力に課題があるため、日本語指導担当はできるだけ在籍級の授業を見に行き、ワークシートへの書き方や音読・発表練習などを個別指導の時間に支援しました。休校期間中は日本語の語彙を増やす機会ととらえ、週一回オンラインによる指導を行いました。

**(三) 在籍級での日本語指導**

在籍級担任と日本語指導担当が連携し、教科内容をあらかじめ学習したり、分からなかったところを補充したりしています。

毎週末に日本語教室での学習について打合せし、学習の様子も参観している中で、担任はその様子を把握しながら授業を行っています。在籍級担任が日頃から心がけているポイントと指導の成果は以下の通りです。  
**〈ポイント〉**  
・ 掲示物の作成・音読指導・動作化・動画や写真の利用・作文指導・曜日や月日の言い方

**〈指導の成果〉**

- ① 音読…初めて見る文章でもほぼつかえることなく正しい発音で音読。
- ② 発話…教科書の物語文や説明文の理解。言葉による置き換え(「えものをとる」→「かりをする」。物語の好きなところを日本語で言ったり中国語で説明したりする。学校からの連絡を家族に中国語で説明する。
- ③ 作文…日本語での簡単な作文

**(四) 全学年でのバイカルチュラル人材育成の視点からの教科指導**

AG5の研究を進めるにあたり、校内研修においてバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のために学校全体でどのように取り組んでいくかを考えました。

そこで本校の中期目標「多様性を理解し、自他を尊重しながら切磋琢磨する児童生徒の育成」を受けて、児童生徒が中国での生活や学習を通

して、①世界には多文化・多言語・多様な価値観があることについて理解すること ②日本の習慣・文化・伝統との比較、検討することの二つの視点から各教科・各学年で取り組めることを話し合い、実践しました。

#### 〈実践例〉

中一社会(地理)：「世界から見た日本の自然環境」の単元学習において、世界の川と日本の川の比較・検討を行いました。中国と日本の二つの文化を持つ生徒は、川の写真を見てすぐに「長江!」「黄河!」と反応して興味を高めることができました。

一方で、単語での反応で終わらずに、自分の思いや考えを短い文章でまとめられるように導いていかなければという課題が出てきました。

### 今年度の取組(二〇二〇年度)

#### (一)日本語指導

##### ①課外の日本語教室(小一・二)

今年度は対象を小学部一・二年生に広げて実施しています(小一金曜日、小二月曜日)。

・小一・休校中(四、五月)はオンライン日本語教室を週二回行い、自己紹介や持ち物、教室での言葉などを学習しました。学校再開後(六月)は学校生活に必要な日本語(わすれた/かして/ありがとう/けが

をしました/頭が痛いです、など)を、ロールプレイやインタビューを多く取り入れ、発話重視で進めました。二期からは教科の先行・補充学習を中心に学習を行っています。

・小二・休校中はオンライン日本語教室を週一回実施し、国語の先行学習を中心に行いました。学校再開後は学級担任と相談しながら、国語と算数の先行・補充学習を行っています。また九月には、日本語指導担当と在籍級担任とでDLAの四項目(話す、読む、書く、聞く)のアセスメントを数回に分けて実施しました。測定結果を在籍級での指導に生かしたいと考えています。

##### ②個別の日本語指導(中一・二・三)

四月二十日の始業式後に対象生徒の保護者と今年度の日本語指導についてオンラインで相談しました。休校中は週一回オンラインによる個別指導、学校再開後は中国語や部活動の時間に取り出し指導を行っています。在籍級担任・教科担任に授業の様子を聞いたり、担当が在籍級の授業の様子を見に行ったりしながら、そのときに必要な学習をしています。個別指導の中で学習言語能力について次のような課題が見られました。今年度はこれらの課題をもとに中部の指導計画を作成する予定です。

#### 〈学習言語能力についての課題〉

・漢字を読むときに中国語読みになつたり、訓読みの単語を音読みしてしまつたりする場面が多く見られる。

・短作文を書くとき、中国語の母語干渉の影響が見られる(「の」の多用、助詞の使い方)。

・数学の文章題における学習用語が正しく読めない。問題で何を問われているのかをつかめない。

・歴史は漢字が難しく覚えていくと話している。

・iPadで調べ学習をするときに、ローマ字が分からないためローマ字入力に苦労している。

##### ③在籍級での日本語指導

#### 〈実践例〉

小一 国語 「うみのかくれんぼ」の授業から、かくれんぼクイズづくり、「とい」と「こたえ」の学習では、教科書を読み取ったあと、自分が選んだ生き物の「かくれるばしょ」「からだのとくちよう」「かくれかた」をまとめることができました。

小二 国語 「どつづつ園のじゅうい」では、JSLカリキュラムの五つの視点より理解支援と表現支援に着目した写真入りのワークシートを作成し、それを用いて獣医の仕事の工夫や自分の考えをまとめました。

また漢字学習では、視覚支援として書き順動画を見ながら、漢字を書く練習を行いました。iPadの書き順動画を何度も見て空書きを行う子どもたちの姿から、記憶支援としても有効だということが分かりました。中二 国語 (在籍級教科担当と日本語指導担当の連携)

毎時間の授業後五分間(一週間で二十分間)、教科担任が音読指導や補充指導を行っています。継続して指導することで学習言語が少しずつ定着し、特に音読で成果が出ています。

#### (二)「多文化共生の学校づくり」を目指した実践の積み上げ

多文化共生の学校づくりを目指して、本校でこれまで培ってきた国際理解教育の活動に、①多様な人とかかわる機会をつくることで他者と係をつくり出す力、②課題を他者とかかわりを通して解決する力、③他者や未来への創造力の育成等の視点をに入れて、各学年、各教科で実践を積んでいます。

#### 〈実践例〉

中三 社会科 多文化共生のまちづくり成功事例の調べ学習を通して、私たちに求められている態度を論述する授業では、総務省が発行する『多文化共生事例集』に載っている多文化共生のまちづくりの成功事例から

共通点を読み取り、最終的には私たちに求められる態度を論述できました。また、「多文化共生2・0」や「インターカルチュラルシティ」などの最新情報も学び、今後の多文化共生の在り方を考える機会となりました。

中学部は全学年が学活や道徳の時間などに、多文化共生に関するワーキングブックを使用したり、自作のテーマで授業を展開したりして「多文化共生」についての考えを深めています。また、中三は多文化共生に関するCMづくり「多文化共生社会における課題をsolve the problemの技術で解決しよう！〜あったらいいなこんなモノ〜」にも取り組みました。

中一「自分が当たり前だと思っ過ぎておいてるけど、他の国ではそうではない、驚かれる事を考えてみよう」(自作資料)。日本と他国では宗教、国の情勢、国民性、食文化などに違いがあることを知り、その違いを尊重することが大切であり、それを知らないと知らず知らずのうちに相手を傷つけてしまうことがあることについて考えました。授業を終えて、中国と日本が似ていることや欧米とは違いがあることも気付いたようです。生徒たちには多様な文化を受け入れる素地があることを実感しました。

中二 言語の平等を考える・わかりやすく伝えよう！ やさしい日本語〜というテーマで、看板や緊急時のことを例に、外国人にも分かりやすい日本語を一緒に考えました。

国際家庭の生徒は日本語を使う機会が学校生活だけという環境のため、『やさしい日本語』を考えるのに苦労しているようでしたが、『やさしい英語』や『やさしい中国語』で考えてみる時間を設定することによって、簡単な言葉(単語)を使って説明すれば大丈夫ということで、安心して学習に取り組みことができました。

中三 ホームルームで考えよう・異文化尊重と公平(多文化社会のジレンマ「掃除編」)では、「異なる文化背景を持つ人たちとうまく折り合いをつけるためにはどうすればよいだろうか?」について考えました。

まとめでは、「その時にどこまで自分が知らない文化や考え方について理解できるかが大切だと思った。相手の文化に合わせる必要も遠ざける必要もないけれど、受け入れる態度を示して、対等に話し合いをしていきたい」という感想が見られました。

＊小学部・オンライン交流会  
小一生活科 山口県下関市立本村小学校一年生との交流(十一月)。生活科「むかしからつたわるあそびを

たのしもう」の学習をメインに、学活、道徳、国語との教科横断型学習を行いました。

小五・六総合 長崎県佐世保市立江上小学校六年生との交流(十月)。

討論テーマ「わたしたちの平和島」..  
「平和島」(架空)に日本、中国、アメリカ、韓国、それぞれのルーツを持つ人々が集まった。そのうち同じルーツを持つ人同士のコミュニケーションが形成され、さまざまな問題が発生。住人たちはこのままではいけないと解決方法を考えることにした。

グループワークでは、①起こりうる問題、②解決方法、③「平和島」の望むべき姿の三点について話し合い、最後の全体会ではホワイトボードにまとめた「めざす平和島の姿」を発表しました。また、事後指導では現実問題として考え、「家の中では自由に過ごし、公共の場ではル



小5・6の交流(グループワーク)

ルを守って快適に過ごしたい。お互いに歩み寄って生活していくことが大切だ」と考えを深めました。

**取組の総括と今後に向けて**

本校での日本語個別指導を三年間担当して実感したことは、十月までは日本語を吸収する時期であり、十一月以降に溜まった水があふれだすかのように急激に発話量が増えるということです。一例として、昨年十一月、在籍級での授業中に、バイリンガルの子どもたちがA児童にいつものように教師の指示を通訳しました。それに対し「わたし わかる」と日本語で意思表示したのです。これまでほとんど進んで日本語で発話することはありませんでしたが、この日を境にA児童の表情は明るくなり、発話が急激に増えました。日本語指導担当としてこの上ない喜びを感じた瞬間でした。

今後は全学年で「多文化共生の学ばせよう」の実践を積み上げ、年度末には実践集としてまとめる予定です。今後もAG5運営指導委員会や関係校のマニラ・大連の先生方と共に「日本人学校日本語向上プログラム」の研究を推進し、日本と中国の架け橋となる人材の育成を目指して教育活動に取り組んでいきます。

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## マニラ日本人学校日本語学級の実践

マニラ日本人学校教諭 島袋源大

昨年度末、マニラ日本人学校は新型コロナウイルスの影響で最後の一週間を休校とし、大幅に縮小した卒業式を行いました。その後もフィリピン国内の感染者数は増え続けており、本校は今年度がスタートしてから六カ月たった今も、残念ながら開校できずにオンラインによる授業を進めています。今回は、コロナ禍でマニラ日本人学校が行ってきた「日本語支援の取り組み」について紹介します。

### 1 コロナ禍での学校の対応

四月後半からZoomを用いた始業式を行い、オンラインによる授業をスタートさせました。私も含めて教職員は初めての授業形態に困惑したり、ネットワーク環境の悪さに頭を悩ませたりと不安や焦りの中で日々を送りつつ、校内研修会で情報担当からアドバイスを受けながら、授業をつくってききました。

現在は、学校の教職員と児童生徒一人一人が学校専用のGoogleアカウントを持ち、それを用いてGoogle Classroom（課題の配布・提出）、Googleスライド（オンライン上のプレゼンテーションツール）、Googleジャムボード（オンライン上のホワイトボード）、Googleフォーム（オンライン上の課題提出）など、あらゆる方法を駆使して、児童生徒が分かりやすく楽しめる授業づくりを努めています。

### 2 日本語学級の取り組みについて

本校ではこれまで週一時間（金曜日の放課後）の日本語学級を設け、国際結婚家庭の児童を対象に取り出し授業を行ってきました。現在は二十五名ほどの児童が学習しています。

この日本語学級で学ぶ児童は授業中に自分の気持ちや考えを表現できなかったり、日本語の文章を書くことに苦戦したりする様子が見られます。英語やタガログ語（フィリピンの言葉）では理解できても日本語で学習するための言葉の力が十分でないことが原因と考えました。これを支援するため、日本語学級では日本語で自分の考えを表現する活動や、体験的に学ぶような授業を行ってきました。

しかし今年度はコロナ流行の影響を受け、対面式の授業を行うことができない状況でした。日本語学級在籍児童は在籍学級のオンラインによる授業での課題を提出できなかったり、授業中の発言も少なかったりと、学習内容がどの程度定着しているのか、実態が見えない部分がありました。そのため、取り出し型の日本語学級を七月からスタートしました。

七月の日本語学級の授業は、どの学年も在籍学級における学習内容の補習やオンラインによる授業において学習内容がどの程度身につけているかを確認し、実態把握をするといった内容になりました。

二学期が八月後半にスタートし、一学期の児童の様子をもとにオンラインで日本語学級の指導を行ってきました。

ました。

オンラインによる授業では、体験的な活動を取り入れることはかなり難しくなるという大きな課題はありましたが、教科と結び付け、在籍学級での学習と関連付けて指導を行ってきました。

各学年の日本語学級の取り組みと成果について報告します。

### 3 各学年の日本語学級の取り組み

① 小学部一年  
日本語学級に在籍する児童は七名です。

フィリピンの「メリエンダ」を題材にして授業に取り組んでいます。メリエンダは日本でいう「おやつ」に近いものにあたります。普段から食べている各家庭のメリエンダを紹介する活動では、身近な生活と関わります。日本のおやつと比較する学習を取り入れることで、互いの文化に興味をもつようになりました。国際結婚家庭の児童にとって身近な二つの国でもあるため、意欲的に、そして楽しそうに取り組む姿が見られました。

この学習活動の最後には発表会を行います。友達の前で堂々と発表することでそれぞれの自信になると考

えています。

## (2) 小学部二年

日本語学級に在籍する児童は八名です。

オンラインによる音読劇に挑戦しました。国語科の題材である「お手紙」の音読劇を在籍級よりも少し先に取り組みました。

まず始めに、音読劇とはどのようなもので、どのように取り組むのかを説明し、登場人物の気持ちを理解する活動を行いました。

音読劇の説明をする際、動画投稿サイトから児童の興味を引きそうな音読劇の動画を実際に見せました。そうすることで、児童は自分たちがこれから取り組む音読劇についてイメージをもつことができました。

また、初めから文を読むのではなく挿し絵の表情に注目させることで、登場人物の気持ちに気付かせることができました。

その結果、一人一役で登場人物になりきって気持ちを考えながら身振り手振りを加えて生き生きと表現活動をすることができました。また、場面をつなげて作品が完成したときは、児童はとても満足しているようでした。

振り返り際には、「わ・か・め」(わかめ)だったこと、がんばったこと、次の

時間のめあて)のモデル文を提示しました。まず、本時の学習で何を学

んだのかを日本語で整理しました。次に何をしたいか、次の時間では、

どんなことをめあてに頑張るのかということを日本語で表しました。

こうしたスモールステップにより、次の時間の目標をもつことができた。

そして次の授業の最初には、前時の振り返りの写真を見せてから本時に入るようにしました。

## (3) 小学部三年

日本語学級に在籍する児童は十三名です。

国語科「すがたをかえる大豆」の題材で扱う「炒る」「煮る」「蒸す」等の調理用語や、つなぎ言葉について、先行的に学習を行いました。

調理用語については動画で確認するだけでなく、イラストや動作化を取り入れたら、児童が既に知っている食品名と調理法をもとに考えさせたりすることで、個々の調理用語の

理解をより深めることができました。スーマン等のフィリピンの食品も取り入れたことで、両国の食品により

興味をもったり、食品名は違ってても同じ調理方法があることに気付いたりすることができました。

つなぎ言葉については、図工科と関連付けてお気に入りの作品を順序

よく友達に紹介する学習を通して、使い方を学ぶことができました。

学習後は、在籍級での学習の中で積極的につなぎ言葉を使って説明する姿が見られました。

## (4) 小学部四年

日本語学級に在籍する児童は六名です。六名で一緒に学習をしたり、日本語力や学習の理解度に基づいて二〜三のグループに分かれて学習したりしています。

オンライン授業が継続しているため、通常学級・日本語学級ともに

Zoomで対話をしながら、Google Classroomで課題配布と回収を行う

って授業を進めてきました。国語の短歌・俳句の学習支援では、

端末上で季節感漂う写真を見ながら季語を探し、画像に直接、気付きをメモしたり俳句を書いたりすることによってイメージと文字を視覚的に結び付ける学習指導を行いました。

俳句をつくるときだけではなく、友達との俳句を聞く際にも、俳句の表

す背景を画像から読み取ることができ、マニラで生活をする児童にとっては、学習内容の理解を促す有効な手立てとなりました。

## (5) 小学部五年

日本語学級に在籍する児童は二名です。この二名の児童は日本語力や

学習言語力に差があるため、時には個別に指導を行うこともあります。

日本語学級では少人数で会話ができ、在籍学級の授業では発言が少ない児童も自ら話す様子が見られました。児童の日常生活に目を向け、そこから学習言語の理解につながるよう

に指導しました。算数の人口密度の学習では、先行学習として「こみぐあい」について

学習しました。児童にとってもなじみのあるフィリピンのモールの写真を提示して、こみぐあいの大きさと

空いているときの様子について、児童は実体験を話しながら「こみぐあい」の言葉の意味について理解することができました。

また、日本語学級で使った言葉や図、式などを手元に置くことにより、在籍学級でも自信をもって発言する機会が増え、いかに先行学習が大切なのか実感できました。

在籍学級における日本語支援については、モデル文を用いた支援を行

ってきました。授業中のグループ学習の場面で用いるジャムボードの画面上にモデル文を提示しました。児童は必要なときにそれらを用いて

考えを表現しました。モデル文を用いた指導の効果を感じることができました。

## (6) 小学部六年

現在、日本語学級に在籍する児童はいません。在籍学級には国際結婚家庭の児童が三名いますが、日常会話や学習会話での困難は見られませんが、

しかし、漢字の習得や文章中の副詞の読み取り、助詞の使い方など書く場面において十分ではない場面が見られます。そこで、日本語学級の指導方法のノウハウを応用して書く課題では丁寧な指導を心がけています。

また、自分の生活場面での例文づくりを行っています。楽しい例文を紹介することで「そういう経験は自分にもある」と共感し、書いた例文を「誰かに読んでもらいたい」とアピールするようになりました。

さらに、総合的な学習の時間にフィリピンの歴史を学習しました。ジオリマ写真と和訳のPDFを配信し、難しい語句には、「水河期(とても寒い時期で、地上は氷が一面に広がっていました)」というように説明をつけて全ての児童にとって理解しやすいようにしました。何度か繰り返して読むことでフィリピンの歴史の概要を理解することができたようです。

### 4 オンラインによる日本語学級指導の成果

オンラインによる日本語学級では少人数だからこそ一人一人に目を向けられる時間の有効性を改めて確認できました。

在籍学級の授業ではなかなか発言できない児童も、日本語学級の少人数授業では生き生きと発言し、積極的に話をする児童が多くなりました。また、担任や日本語学級の他の児童に認められることで、在籍学級でも堂々と発言することができるようになりました。

オンライン授業においては、教師が一方的に説明をするような一斉授業になってしまいがちです。本校ではGoogleのサービスであるジャムボードやGoogleスライドを用いて授業を進めています。これらのサービスを利用して児童はオンライン上のホワイトボードに絵や図を書いて自分の考えを示すことができます。そのため、児童は意見や考えを文章以外でも表現できるようになりました。

これらの機能を用いることで授業では自分の意見や感想を伝えたり、表現したりする場面が増えてきました。今後、対面式の授業が再開された

ときにもこのジャムボードを用いて話し合い活動の場面を設定することで、ディスカッションを保ちながらも積極的な意見交換を促すことができると考えられます。

さらに、本校では一〜三年生の日本語学級に在籍児童数の不足を購入し、対面式授業での導入を計画しています。一人一台の端末を使用することで、児童は自分のペースに合わせて動画を視聴したり、実際に端末を使って写真や動画を撮影したりすることができるようになります。

例えば、一年生の「かたち」の学習では、校内にある「まるいもの」や「しかくいもの」を写真に収めて紹介する活動も可能になります。

今後の対面式授業において、これまでのオンラインで培ってきた児童の表現活動を支える支援を進めるとともに、VR導入による日本語指導の方法についても研究を進めていきたいです。

### 5 オンライン日本語学級指導における今後の課題

オンラインによる日本語学級指導の課題としては三つあげられます。

一つ目は「授業の目標設定と児童の活動時間(読む・書く・話す・聞く)の時間配分が難しいこと」です。日

本語学級では少人数指導ですので、児童が課題に取り組む様子を在籍学級の指導よりもきめ細かく見取ることができています。そこで、それぞれの児童が書いたり読んだりする速さにバラつきがあることに気が付きました。個別に声を掛けたり絵や図などをいくつも見せたりして、書くことや読むことの支援をしてきましたが、授業時間内に達成できない児童もいました。今後はオンラインでも、それぞれの児童に合った支援の方法を模索していきたいです。

二つ目は「保護者による課題の確認が難しいこと」です。Googleクラスルームを通して課題や授業中のノート提出を行っていますが、保護者の協力が不可欠な状況です。日本語での課題配信のため、国際結婚家庭の児童においては提出できない場合もあります。保護者による課題の確認が難しいと考えられるので、今後の課題として取り組んでいきたいと思えます。

三つ目は「体験的活動を取り入れることが難しいこと」です。教科の学習理解を支える体験的活動はオンラインにおいても必要なことです。オンラインが続く場合の体験的活動をいかに進めるか、今後の課題として取り組んでいきたいと考えています。

# エー A ジー G5 ファイブ だより

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## 高度なグローバル人材の育成～シンガポール日本人学校の実践～

シンガポール日本人学校チャンギ校教諭 中嶋尊弘

シンガポール日本人学校にはクレメンティ校とチャンギ校の2つの小学部があり、我がチャンギ校は、国際的なハブ空港として有名なチャンギ国際空港の近くにあります。人種のつぼみである当地において「多様性」の中で異文化との接触を経験し、母国の教育を受けながら日本を客観視できる環境にある本校の子どもたちこそ、「高度なグローバル人材」に成長する可能性を秘めていると感じます。本校の実践は日本の教育の発展に貢献できるのではないかと、そんな「使命感」を感じてAG5 Projectをスタートさせました。



AG5プロジェクトメンバー  
(左から2人目が中嶋先生)

### 1 はじめに

コロナ禍以前には数分に一度、近隣のチャンギ国際空港を離着陸する飛行機を目視でき、世界へ飛躍していく本校の児童と重ねていました。

また、今や世界的な金融センターとしての地位を確立しているシンガポールには多様な民族と文化が存在し、一歩外に出れば英語はもちろん、中国系、マレー系、インド系の言語が聞かれ、商店、建造物などが絶妙なバランスを保って融合している姿を見ることが出来ます。

一方、コロナ禍で浮き彫りになった日本の教育の安定性と後進性。これまでの学校教育のあり方(安定性)だけでは、全く対応できない事態が浮き彫りになりました。しかし、同じアジア諸国に目を向けると、ICT戦略をいち早く取り入れていた中国やシンガポールなどの国は、緊急時の中でも安定的に学校教育を継続できていました。だから、現地にいる私たちはローカル校の取り組みなどをヒントにオンライン授業の体制を構築し、何とか対応して参りました。

改革し、国際社会をけん引するリーダー「高度なグローバル人材」を育成していくことは日本社会の急務です。リアリティーの伴った多様性を知り、母国の教育を受けながら、母国社会を客観視できる環境にある本校の子どもたちこそ、「高度なグローバル人材」に成長する可能性を秘めていると感じます。そして、日本の公立小学校のシステムに近い本校(在外教育施設)が、新学習指導要領で求める「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、B(PYP)の理念を取り入れた探究学習カリキュラムを構築することができたら、数年後、日本の公立小学校でも実現可能なモデルケースとしての役割を果たし、日本の教育の発展に貢献できるのではないかと考えています。

### 2 少人数のProjectチームから

AG5 Projectが始まったのが二〇一九年六月。当時、すでに行われていた学び合いの研究が本校のメイン研究テーマであったため、四名でProjectを始めることになりました。

まず議題にあがったのが「どこまでB(PYP)の理念を取り入れるか」でした。B(PYP)を取り入れると易ではありません。PYPのバイブル[*making pyp happen*]を読み込んでも具体的な授業をイメージできません。また、PYP認定校である聖ヨゼフ小学校や開智望小学校、PYP候補校の東京学芸大学附属大泉小学校の実践を参観させてもいただきましたが、どこも探究学習のカリキュラム開発が中核に位置付けられ、全校あげて数年間の研鑽の末、現在の素晴らしいカリキュラムを完成させていました。さらに取り扱える授業時数の違い、B特有の専門用語の理解など、「B(PYP)の理解と適応」という壁が大きく立ちました。苦しい半年間を経験しました。

二〇二〇年四月。シンガポールは実質ロックダウン状態となり学校も閉鎖。我々はオンライン授業体制の構築と開発に全ての時間を注ぎ、研究は一時停止。そして八月、激動の一学期を終え、AG5 Projectを再開。しかしシンガポール政府の厳しい規制により、集団での移動、五十人以上の学年集会なども禁止。外部との接触はおろか学校内の交流も満足にできない状況となりました。元々、本校の探究学習のカリキュラムは「社会科見学」や「校外学習」を学習活動の中心に置いていたため、全内容を練り直す必要が生まれました。

また、教員の「**田**の学習期間」と定めていた一学期は何もできず、全教員の**田**理解向上を短期で行わなければなりません。そうした厳しい状況から生まれたのが「大人の探究」プログラムでした。

### 3 大人の探究

「大人の探究」は、大人が子どもになりきって学ぶことを意味します。「学び手」としてPYPを経験する中で、複雑な理論や授業に生かす判断力を育むことを目的とした研究方法です。他にも一定期間**田**の理論と向き合うことで「自分のベースで考えられる」「研究が徐々に自分事化する」などの利点も考えられます。緊急措置でしたが、厳しい状況下においては最善の**idea**でした。

そこで教師役として開智望小学校の五木田洋平先生を招き、「大人の探究」を開始することになったのです。この探究プログラムは全七回、オンラインで実施。前半は学習者として、後半は授業者として参加します。五木田先生には開智望小学校で六週間かけて行う探究学習を全四回の内容にしぼり込んでいただきました。その中で私たちは学び手として子どもが直面するであろう「つまずき」や「悩み」を実感していくことにな

ります。特に「一人の行動によって、組織は変化していく」というCarter **田** (以下、**C**) が初めて提示された時の戸惑いは子どもたちの感覚を理解する上でも有益な経験でした。

こうした経験を重ね、徐々に私たちの**C**への理解は変化していきます。例えば、研修の二時間目に行った「世の中の組織」を調査する活動ではイノベーションを起こしている組織を見つけたり、業績を伸ばし続けている組織の原因を調査したりしました。そうした具体的な学習活動を通して、一人一人が世の中には多様な組織があることを再認識します。さらに、教員同士の意見共有を通じて「組織」のイメージが各自の中で拡大していきます。当初は単なる文章として受け止めていた**C**が、それぞれ探究した組織像やイノベーション的な人間像と結びつき始めたのです。それは「組織」が単なる言葉の意味の理解のみだった状態から「概念」へと変化した過程でした。

単元における学習活動は、**C**という「抽象概念」を理解するための「具体的活動」であること。つまり、**田**では「**具体と抽象の往復**」を繰り返しながら高度な概念理解を図っていることを体験的に理解することができたのです。そのために私たち教師は、

物事を抽象化する思考力を鍛える必要があることも発見できました。

また、大人の探究は「探究の単元」(Unit of Inquiry)の重要性も教えてくれました。**田**の探究学習は教科横断型の「六つの領域」で構成され、グローバル型の能力を育成する枠組みがあります。当初、本校の時間の関係上、六つの領域を実践するのは困難と考え、独自の三領域を設定していましたが、「六つの領域」「7つのKey Concept」「CI」という各要素が関連し合う、高度な探究を生み出していることを学びました。そこで独自プランはやめ、可能な限り**田**の原則に則り六領域で構成するよう変更したのです。

このように私たち教師が「PYPの探究学習」を「構造」として少しずつ概観できるようにしたこと、実践への意欲と少しの自信をもてるようになっていきました。

### 4 四年部実践「シンガポール探検」

#### ① 探究の枠組み

領域…私たちは自分たちをどう組織しているのか(社会と組織の探究)。領域の詳細…人間が作ったシステムとコミュニケーションの相互的な関連性。**C**…多様な民族はちがいを尊重し

テーマ：探究サイクルを体感する		
日時	研修内容	備考
① 8/31	理想の学校をつくらう (論議行、実践、発表)	研究全体会
② 9/7	インタビューをしよう (構建)	必須参加
③ 9/14	インタビューをしよう (構建)	必須参加
④ 9/23	発表 (発表・考察) + 人間関係の理解	必須参加
⑤ 9/30	CIの作り方 プランナーの書き方	任意参加
⑥ 10/5	Key concept (中心概念)の扱い方	任意参加
⑦ 10/7	総括的評価と形成的評価について	任意参加
⑧ 10/12	二字票、三字票のプランナーをつくらう	研究全体会



**大人の探究**

講師：開智望小学校 五木田先生  
研修：全7回

「大人の探究」研修

	研修前	研修後
探究の領域	独自の3領域	IBの6つの領域+個人探究
Central Idea	学習のねらい？ 価値観？	単元で扱う学習内容の原理原則 単元で身につけたい概念の集積
7つの Key Concept	物事を多様に見る視点	CIの理解を深めるための引き出し
探究のサイクル	疑問→仮説→調査観察→実験 検証→考察発表（開智望小）	疑問～考察まで、一方通行ではなく 行きつ戻りつする過程
探究の流れ (Line Of Inquiry)	探究サイクルとどう違う？	中心的な学習活動の大枠 (以下 LOD)
評価	総括的評価中心	総括的評価とルーブリックを用いた 形成的評価の開発
教師のマインド	よくわからない不安	基礎知識、助言者を得た安心感 実践へのモチベーション

「大人の探究」の成果

ながら共生している。  
「O1」多様な民族のちがいの体験（食べてみる、作ってみる、行ってみる）。「O2」について仮説を立てて予想し「多様な民族のちがいの調査」。「O3」をもとに「東京オリンピックをいろいろな文化をもつ人と成功させる提案」の発表。

シンガポールで長く生活している子もいればそうでない子もいて、言語や文化のちがいを体感する機会には個人差があります。そこでは「どれだけシンガポールのことを知っているか」をSchoolというクイズアプリを使って楽しく学習しました。本来であればこの後、チャイナタウンやリトルインディアなど各民族の

街に出かけたいところですが、今回はご家庭の協力のもと二週間の期間を設け、好きな街で取材し、写真やスライドにまとめる活動を行いました。

**③ 疑問&仮説**  
ここでは、各自の学習結果を動画で発表したり、Yチャートにまとめて可視化したりしました。すると、衣装、マナー、宗教、行事、そして言語など、共通点よりも「ちがいの多さを実感し、子どもたちからは「これらの民族はどうやってまとまっているのかな」との問いが生まれました。そこで教師が「仮の解答」として「三つの民族は、ちがいを尊重しながら共生している」というCを提示しました。こうして、「本当に尊重し合い、共生し合っているか」を検証する探究が始まったのです。今回はCを扱った初の研究授業ということもあり「子どもにどうCを提示し、伝えるか」が教師側のテーマでした。「大きな仮説」「仮の結論」として提示することの是非は今後の検証が必要なお話です。

**④ 調査 仮説の検証とKey Concept**  
子どもたちはCを「いかにしてシンガポールは一つにまとまっているのか」という問いに変換し、グループで仮説を考え、その検証に入りま

す。幸い、チャング校には多様な種類のローカルスタッフの方たちが常駐しているため、インタビューで有益な情報を得ることができました。そして仮説の検証ですが、この段階が探究学習の課題と新学習指導要領でも指摘されています。私たちは以下の手順を試しました。

① グループで調べたことを教師が提示したKey Concept (Function, Connection, Causation) で色分けし、情報の偏りを可視化する。

② 調べたことをクラゲチャートに可視化し、情報の不足を検討する。

③ 不十分な点やもっと調べたいことなどを振り返りに書き次回修正する。

④ グループ同士でリハーサルをして批評し合う。

特に③の修正では足りない情報を得るために必要な人へインタビューを再度行いました。また、④では批評し合うことでお互いの良さを吸収し合い非常に内容が洗練されていきました。「内容を批評し、人を批評しない」という姿勢は探究学習に必須の学級文化だと実感しています。また調査活動の後、一回のまとめで終わるのではなく「調査↓まとめ↓修正↓再調査↓まとめ」を繰り返す流れが、情報の整理・分析能力を育むために肝要だと感じます。今後、検証を重ねながら情報の整理分析方法



調べたことや気づきなどを可視化

必然的に複数の資料に当たることになります。その作業は、多角的に物

Key Conceptを活用する中で、児童は新たな視点で分析するため、効果があるとも感じます。さらに、立ち戻る場所として学習の目的意識を強め、児童の学び合いを促進する効果があるとも感じます。さらに、児童は新たな視点で分析するため、必然的に複数の資料に当たることになります。その作業は、多角的に物



ウェットマーケットグループのスライド

の価値を高めていきたいと思えます。⑤発表 写真資料は、ウェットマーケットグループのスライドの一部です。最後のスライドは、どの班も〇につながることを意識してまとめを書きました。その他にも、調べ学習の段階で教師は常に「仮説に対する見解」を作らう声をかけました。子どもたちは、そも

AGS Projectに携わって約一年。ようやく研究授業ができるまでになりました。当初、難解な〇の理論に出合った時、「しっかりとした理

解の土台を作り、十年後のチャングキ小でも継続されている研究にしよう」とProjectメンバーと誓い合いました。他にもやるべきことがあふれている中、子どもにとつて有益な授業を作るには長いスパンで教師が十分に学ぶ時間を確保する必要があります。また一時的な助言者ではなく共に学び続ける「伴走者」の存在は欠かせません。五木田先生に関わっていただけたことは大変重要な体験でした。

今年度はコロナ禍という困難な状況の中、二年部も単元「つながる、ひろがるBodyのわ」において「人は、支え合って生きている」という〇のもと、人間関係の探究にチャレンジしました。この実践で興味深いのは、教師が設定した〇に対して、反対意見(反証)も認めるところから探究が始まっているところです。また、六年部では小学校最後の学びを総括する単元「Ed x 6年」を模索中です。これまでの価値観を覆すような世界的な困難に私たちは何を学んだのか。そして、どんな未来を作りたいか。全員が自由にプレゼンする計画です。各学級の代表者には、体育館で、可能な限りの観客カメラ数台でオンライン中継をする大舞台を用意しようと考えています。

5 終わりに

デュイイは『論理学』の中で、「探究」を「不確定な状況を、確定した状況に(中略)転化させること」と述べています。まさに、前代未聞の状況の中で、子どもに最高の授業を届けようとする私たちの仕事は探究活動そのものです。どんな状況でも「教師自身が探究者」であれば道は開けるはずで、これからも実践を重ねながら信頼性のあるカリキュラムを開発し、教育の発展に貢献できる研究に参ります。

先日、シンガポール、香港、パリでの指定校の勉強会が行われました。短期スパンで教員が入れ替わる中、学校に長く残る価値を残すべく、「システムとして教師が学べる環境」を作ることはAGS Projectにとって絶対が必要だと思えます。

今年度はコロナ禍という困難な状況の中、二年部も単元「つながる、ひろがるBodyのわ」において「人は、支え合って生きている」という〇のもと、人間関係の探究にチャレンジしました。この実践で興味深いのは、教師が設定した〇に対して、反対意見(反証)も認めるところから探究が始まっているところです。また、六年部では小学校最後の学びを総括する単元「Ed x 6年」を模索中です。これまでの価値観を覆すような世界的な困難に私たちは何を学んだのか。そして、どんな未来を作りたいか。全員が自由にプレゼンする計画です。各学級の代表者には、体育館で、可能な限りの観客カメラ数台でオンライン中継をする大舞台を用意しようと考えています。



〒105-0002

東京都港区愛宕1-3-4 愛宕東洋ビル 6階

公益財団法人 海外子女教育振興財団

事業部 教育企画・教育相談チーム

TEL : 03-4330-1352

FAX : 03-4330-1355

E-mail : [ag5@joes.or.jp](mailto:ag5@joes.or.jp)

URL : <https://www.joes.or.jp>



海外子女教育委員会誌

# 海外子女教育 4

2022年3月号

特集1  
海外で身につけた  
学習法

特集2  
児童書をつくる人々

巻頭対談  
富友カナメさん  
パナソニック・ソリューションズ

要人インタビュー  
米国女子学院高等学校

海外レポート  
台北日本人学校  
ポコタ日本人学校  
アークヒル補習授業校  
アーモスト補習授業校

